

横濱市震災誌
(未定稿) 第壹冊

KY369
/
27

横浜市立図書館



0002994038

K

KY369
1
27

横濱市震災誌

(未定稿) 第壹冊

横浜市立図書館



0002994038

KY367
/
27

橫濱市震災誌

第壹冊

橫濱市役所

緒言

本誌は大正十二年十二月、市史編纂相談會の議を經、大正十三年度より編纂のことに決し、一名の專任者を設けて之に従事せしめしが、資料蒐集困難なると蒐集版圍の諸方面なるとに依りて、事業進捗せざるを以て、其年末より更に二名の擔當者を増員し、漸く十四年十一月を以て編纂を結了するに至れり。而かも成書尙大にして當初の方針に適合せざる點なきにしも非ざりしを以て、其後別人の手に依りて削正改竄せしもの多し。抑も震災の當時に在りては一葉半塊の筆紙すら得るに難く、諸事を筆録して後代に傳へんとするが如き遠謀深慮の存せざりしは蓋し已むを得ざりし

所なり。されば多くは生死の間に出入せし若干の人士に就いて
其談話を聞書せし外は、悉く當時に遡りての追記なれば、記事正鴻
を失へるものあらんことを恐る。今や假印刷成り、諸士の劉覽を
仰がんとするに臨めり。乃ち一言を述べて緒言と爲す。冀くは
誤謬の點を一々指摘し給はんことを。

二

大正十五年二月

横濱市史編纂係誌

横濱市震災誌第一冊目次

第一編 概 説

第一章 横濱市大震大火災の概況	四頁
第一節 激震の突發	四
第二節 猛火の襲來	七
第三節 災後の市中	三
第四節 被害の諸計數	一五
附横濱市大震大火災の公報	一九
第五節 罹災民の避難	二
第六節 災後の悲劇	三
第七節 震災後の不安	三

目次

一

第八節 災後の善後施爲 (其の一) 二四

第九節 罹災民の應急行動 二七

第十節 皇室の御救助 各地からの救援救護 三〇

第十一節 災後の善後施爲 (其の二) 三三

第十二節 復興の著手 (其の一) 四二

第十三節 復興の著手 (其の二) 四七

第十四節 罹災世帯數竝に罹災人口等の統計 五四

第二章 震災と横濱市 前横濱市長 渡邊勝三郎述 六四

第三章 本市を中心として見たる震災の諸學説及調査 六四

第一節 今次の大震特に横濱の大震に就て 神奈川縣測候所長技師 高木健述 八四

第二節 横濱震災前後の氣象竝に火災の火道 神奈川縣測候所調査 九三

第三節 横濱大震大火災當時の旋風 同 上 九九

第四節 地質學上より觀たる横濱の地形變化 一二一

横濱市震災誌 第一册

横濱市役所編

第一編 概説

吾々横濱市民として、一生忘れることの出来ない想ひ出は、去る大正十二年九月一日午前十一時五十八分、横濱、東京及神奈川、千葉、静岡、山梨等の諸縣を襲つたあの恐ろしい殘虐な大地震である。

その被害の大きかつたことは、横濱と東京であつたが、横濱は殊にひどく、曾てなかつた大慘害を受けた。

大地震で、市内の建物は殆んど全部倒潰した上に、つゞいて起つた猛烈な火災の爲めに、殆んど横濱全市は、一夜の中に焼野原となつてしまつたのである。

東洋第一の輸出港として矜つてゐた横濱も、再び復活することは出来ないと、絶望されたのであるが、やがて市民の心に、破壊に對する尊い建設心が眼覺め來た時、彼等はあ

る限り力を盡して活動に向つて進んだのである。官民一致協力して、復興に努めた結果、いつの間にか新しい家が續々と出来て、一二年経つ中に、横濱は再び甦つたのである。破壊した棧橋も、岸壁も今日は改築されて、常に船舶で賑つてゐる。

さてあの大地震の震源地は、何れであるかとの解説は、學者の間に可成り論議され、今日では相模弱線の深き地下であると推定されてゐる。此の大正の地震と同じやうな大地震は、元祿と安政に江戸にもあつた。それから後明治二十四年十月二十八日朝濃尾にても大地震があつて、之も同じ程度の大地震であつたといはれてゐるが、大正の地震のやうに、火災が併發して、斯やうな慘状を呈したことは、曾てなかつた様である。

世界五大都市の一つである大東京と、我が唯一の輸出港の横濱との市街は、見る影もなく焼盡され、過去の盛觀は、瞬く間に消え失せてしまつたのであつた。横須賀、其他神奈川縣下の町村等、殆んど火災に遭はない所はなかつた。

當時の被害世帯數は、社會局で國勢調査の例に倣つて調査した結果に據れば、全燒三十一萬一千九十、半燒五百十七、全潰八萬三千八百十九、半潰九萬一千二百三十二、流失一千三百九十、大破十三萬六千五百七十二、合計六十九萬四千六百二十一で、人口は實に三百四十萬四千八百九十八であつた。

交通・通信等のあらゆる機關は、全く役立たなくなつたので、長い間の悦樂の世界は、暗黒の世界となつてしまつた。今其犠牲と爲れる者を統計するに、死者九萬一千三百四十四人、行衛不明者一萬三千二百七十五人、計十萬四千六百十九人である。負傷者は數萬で、その中の重傷者は一萬六千五百十四人である。

申すも御いたはしき次第であるが、宮家にも御遭難遊ばされたお方がお三方もおありになつた。在留外人でも無慘な死を遂げた人は、澤山あつた。親子・夫婦・兄弟が離れ、（ハ）になつた者は、澤山あつたし、一家擧げて全滅したのも、澤山あつた。

震災後幾日かの間、三百萬有餘の罹災民等は、衣食もなく、住むところもなく、燒跡に、道邊つてゐたが、やがて食物の配給も受けて、生活する力も得た。

お慈悲深い 天皇陛下には、たくさんの御内帑金を、罹災民に御下賜された。

斯やうにして、罹災民の救護や、物質の配給は、縣市當局の手ばかりでなく、各地から來濱した救護團から受けた。英、米、等から種々の物質を送附して來て、罹災民の救助に資してくれた。

今、横濱市は、著々復興に、復興にと急いでゐる。聽て、耐震耐火の建物が、建てられた時の市街地は、震災前の市街よりは、一步進んだものであらうと信ずる。

第一章 横濱市大震火大災の概況

第一節 激震の突發

九月一日、この日は、夜明け頃から天候が穏やかでなかつた。六時頃驟雨が急にひどく降り出し、風も多少出て来て、一時荒模様であつたが、二百十日の前日だからと、誰も思つたくらゐのものであつた。ところが、九時頃から雨はすっかり歇んで、風も和いで澄みきつた大空に、大陽は美しく輝いてゐた。初秋の氣持をしみじみと感じた。よもやあんな恐ろしい大地震が來やうとは、誰も思はなかつたらう。それは午前一分十五秒の時、恰度どこの家でも晝飯の頃であつた。突然どこからか遠雷のやうな地響きが出て來たと、思ふ間もなく大地は大波のやうに揺れ始めて、あの恐ろしい上下動の激震が襲つて來たのである。表に逃げ出した時、總て地上の物が破壊されてしまつたのを見ると、人間生活の終りではないかとさへ思はずにゐられなかつた。官公衛會社工場、學校、寺院、大商店、住宅等は第一震で殆んど倒潰した。續いて水平動の激震に建物は全部破壊されてしまつた。倒潰しなかつたのは、コンクリートの完全な建物と、場末の

好い地盤の上に立つてゐた家屋とであらう。正金の建物は可なり破損したが、川崎銀行の建物だけはびくともしなかつた。尙又道路軌道空地等に龜裂・陥没の出來たことは夥しかつた。殊に川岸に多く、道路が川の中へめり込んでゐる所が少くなかつた。水道鐵管の破裂は勿論で、高島町、平沼町、横濱公園等は膝頭まで出水したのが、却つて避難民は幸ひであつた。橋は殆んど破壊するか、焼け落ちるかした。埠頭の大棧橋さへ一部破壊されて、海中に落ち込んでしまつた。尙港の岸壁も所々龜裂を生じて、海中に落ち込んだところは少くなかつた。當時横濱船渠會社では、建造中の輕巡洋艦那珂の艦體を破損した上に、艦内を全部焼き拂はれた。水道瓦斯管の破裂、交通通信機關はいふまでもなく悉く杜絶した。震動が如何に激しかつたかといふことは、軌道レールの切斷したことや、各所の電話地下線マンホールが數尺も位置を轉じたのを見ても、又掃部山の井伊大老銅像が四十五度も横向きになつたのを見ても知れる。家屋が倒れたのは、トテモ早かつたので、逃げる遠もなく下敷になつた者が非常に多かつた。しかし運のよい者は自分で這ひ出したり、人に助けられたりしたが、或はそのまゝ壓死し、或は生きながら焼死した無残な人達が澤山あつた。市の中心である關内方面は、開港以來の埋立地である。従つて地盤は弱かつたので、倒潰が非常に多く、一建物で、十數名或は

數十名の壓死者を出だした所がたくさんあつた。殊に横濱地方區裁判所などは所長以下の判檢事・吏員・辯護士其の他百餘名が壓死を遂げた。横濱郵便局では局員九十名税關では吏員・傭人約五十名が無殘な壓死をした。當日大棧橋には、正午解纜のコレア丸が横付けになつてゐて、數百人の見送人が船を見上げて別れを惜んでゐた時であつた。其の時轟然たる響と共に、棧橋は半海中に落ちたので、見送りに來て溺死した人が多かつた。元來海岸通りと云ふ地は、まるで西洋の港の町へでも行つたやうは優美な街であつた。外人の邸宅や、外人俱樂部など、港に面してつらなつてゐた。中にもオリエンタル・パレス・ホテルや、グラランド・ホテルの立派な建物が人眼を惹いてゐた。この二つのホテルは、各國外人の泊り場所であつた。或夜には華やかな舞踏會が催され、在留外人や旅の外人たちの楽しい遊び場とされてゐた處である。永い間外人達の楽しい夢を宿してゐた二つのホテルは、無殘にも崩壊して、各々數十名の内外人も傷ましい壓死を遂げたのである。同町の一部で南京街といはれてゐた支那人の居留地は、兎に角横濱港の名所であつた。道路狭かつた上に、建物が古い赤煉瓦造りだつたので、其被害は非常に大きなもので、總在留者の三分の一強、即ち二千人の死者を出したのである。町内でこれほど多數の死者を出した所は横濱市にはなかつた。其の他山下町に居留

する歐米人の中に多數の死者を出し、中には領事・紳商などもあつた。埋立地である上に家の入組んだ關外方面や、伊勢佐木町邊も其被害同様に甚しく、一家全滅の悲運に遭つた家は尠くなかつた。眞金町・永樂町兩街の遊廓では、一千人の娼妓の中、三百人の燒死を出したのである。高島町界隈の工場地帯でも數多の死者を出した。蒔田大岡・瀧頭磯子・藤棚・神奈川・宇安等丘陵近くの地域も、倒潰家屋を多く出したが、被害は割になかつた。市の三面を繞る丘陵地の街々は、一帯に地盤堅かつたので、被害は甚しくなかつたが、歐米人の住宅地であつた山手町の一帯は、丘陵地であつたに係はらず、被害の甚しかつたといふ理由は、土を盛り上げた地面が多く、其の上に病院・學校・教會堂・邸宅・ホテル等大建物が建てられてゐるので、一堪まりもなく倒潰したのである。そのために歐米人の教育家や、宗教家やが尠からず壓死した。

第一節 猛火の襲來

恐ろしい大地震に入々は生きた氣持がなくなつてゐた折柄、市内の數十箇所から殆んど一齊に發火した。早いのは直後、遅いのは一時間位して發火し、關内關外戸部神奈川山手到る所に黒煙が濛々と立のぼつて來た。縣測候所の調査に據ると、發火の場

所は明確なだけでも二百八十九箇所といふ多數であつた。その理由は丁度午餐の炊事時分であつたからだらう。中には薬品の爆發から發火したものもあつた。發火するや間もなく、強い西南風が吹いて來たので、火は恣に猛威を振つて、全市を嘗めつくさうとかゝつた。この時更に大旋風が各所に起つたので、火勢は愈々加つて午後五時頃には、關内、關外を初め、戸部、平沼、山手、蒔田、大岡、北方、根岸、本牧、神奈川、子安等全市の大部分は、火の海と化したのである。縣測候所の調査によると、當日の旋風が起つたのが明かなのは三十箇所であつたと云ふ。この恐ろしい火災の中に、人々が逃げ迷ふ姿は何といふ無残な様であつたらう。あまりに火が早いために、親は下敷になつた我子を眼の前に見ながら、どうすることも出来なかつた。夫婦も兄弟も、骨肉はみんな一生にない苦みを互にし合つたのである。厭まで助けやうと思つて、折角助け出したもの、逃げ遅れて途中で焼死した者も、澤山あつた。逃げ遅れた人でも、火の中を甘く通りぬけて、逃げ場を探し得て助かつた人もあつた。又港内に碇泊中の船舶に助けられた人も、澤山あつたが、家屋が倒潰と同時に、壓死し、焼死した者は數限りがなかつた。避難地へ行く道となつてゐる橋が焼け落ちてゐて、どうすることも出来なくなつて、川岸の舟に飛び乗り、舟諸共に焼かれて死んだ者もあつた。揮發庫、石油庫などが爆裂して、水面にも火

が流れ、舢舨や荷物船が多數焔に包まれて、これが爲めに爛死をした者も多數あつた。こゝに各警察署の管轄區に分けた死者の概數を記載しやう。伊勢佐木署管内は其の數約一萬一千人、加賀町署管内は四千五百人、壽署管内二千三百人、戸部署管内二千二百人、水上署管内一千三百人、山手署管内七百六十人、神奈川署管内百三十人、合計二萬二千餘人、此外行衛不明者の數は約二千人であつた。右の死者及行衛不明者は、總計數に依ると、全市の人口を約四十五萬として、百人に對して五人の割で死んだ譯である。斯んなに多くの死者を出したのであるから、吉田橋と大江橋と同様に、萬國、谷戸、山下、鶴車などの橋々が、焼失をしたとしたなら、どれほど出したかも知れない。それは各方面へ遁がれた避難者にとつて實に幸ひなことであつた。尙當日は、暑休明けの日であつたので、各學校は、何れも始業式を擧げ、十一時前後には、全生徒は歸つた後であつたので、何より幸であつた。全市の小學兒童數約五萬四千人の中に、死者九百十六人を出し、教員數九百九十七人中、死者二十一人を出した。當時火勢の猛烈であつたことはいふまでもないが、風力の強烈さには驚かざるを得なかつた。横濱の記ある各種の印刷物などが、八里九里の海上を飛んで、遠く房總地方に落ちて來たといふ事であつた。縣測候所員の談に、當時所長も不幸にして死し、觀測器械もすつかり焼失してしまつたので、風速

は測ることは出来なかつたが、最も強かつた風力は烈風五の程度で、旋風を生じた時には、颶風は六の程度であつたことである。この日は大空に積雲キモラスが起つて、青空は深く鎖されたので、人々はまた何か天變があるのではないかと一層恐怖した。黒煙と塵の爲めに銅色となつた太陽は、時々現はれて、異様な光を放つた。生き残つた人々は、何かもつと恐ろしいことが起る暗示ではないかと戦慄した。斯くて猛火は威力をほし、いまゝにして、當日八九時頃までには、市街地の約八分通りを灰燼と化し、焼失戸數約五萬六千、其の世帯數約六萬二千の多きを算したが、餘燼は容易に終熄せず、三日も四日も煙り續け、高島町中村町などの石油庫や揮發庫は、十日内外の間も盛に黒煙を吐き、山下町の前田橋附近竝に吉濱町の石炭貯藏場の如きは、四五十日の永い間も炎々と燃え盛つてゐた。當時我が市役所はどういふ状態にあつたかといふと、廳舎は明治四十四年に新築された煉瓦三階造の堅牢なもので、流石の大震にも克く耐へたので、執務中の吏員はみな無事で、一時市民が廳内に避難したほどであつたが、間もなく火災は、忽ち附近一帯の家屋を燒盡し、刻々廳舎に迫つて來たので、幹部以下吏員一同は、極力防火に努めて、一時は大事に至らなかつたが、再び側面の川向ふから火災が襲ふて來さうなので、萬一を慮りて、先づ御眞影を擁して、間近の公園地内に奉遷した。しかし、續いて防火に努

めてゐたが、午後四時頃、突然屋根一面に火を吹き出だし、どうとも爲し難い状態となつたので、書類帳簿等大切な品を燒いたことは遺憾の次第であつた。本廳舎の吏員は無事であつたに拘らず、市内各方面の勤務所に居た吏員雇傭員の中で四十三名の犠牲者を出だし、市會議員にも四名の遭難者を出だしたことは、洵に氣の毒の至りであつた。かやうな大凶變のことだつたから、民衆を護るべき警察官廳とても大被害を受けた。縣警察部を始めとして、加賀町伊勢佐木山手壽戸部水上の六警察署は何れも罹災し、残つたのは僅に神奈川署一箇所で、亦警察官吏の死傷も尠くなかつた。殊に火に妨げられて、活動の自由を缺き、十分な活動は出来なかつた事は無理はなかつた。然し危険を冒して職務につくし、或は人命の救助に、或は避難箇所の指示指導に、或は避難地内の救護等に、多大の努力を爲し、勇敢の行動をなした者は決して尠くはない。警察官が住民を指揮して、消防に努めさせた爲めに、場末地域などは火を免れた所が澤山あつた。西戸部町の兩三箇所、神奈川町の下臺などでは、警察官の愆うした働きが特に著しく認められた所であつた。壓死した妻と子との頭髮を手早く切取て、ポケットに納めて、其の儘消防に赴き、數日間救護に盡したといふ奇特巡查も、戸部署の部内にあつた。市内數箇所の消防署及分署としても、同様に救護の爲めに盡した。尤も神奈川の消防分署

のみは被害少く、多大の活動を爲し得られたやうである。其の他當時民衆の中にも危険を冒して人命の救助に努め、犠牲的精神を發揮した者が尠くなかつたので、是等奇特な行動を爲した警察官吏消防官吏及町民に對しては、後に其の筋より夫々表彰したのである。根岸の横濱刑務所も、建物の大部分倒潰焼失して、數十名の死者を出し、煉瓦積み等の外堀も悉く崩壊して拘禁設備が不可能になつたのみならず、食糧も缺乏したので、收容者の全部一千餘人を一時解放するの已むなきに至つた。斯かる事は今を距る二百六十年前の寛文七年に、江戸傳馬町の牢舎に於て其の例があつて以來始めてのことだといはれてゐる。

第三節 災後の市中

帝都の關門の本邦隨一の輸出港として、繁榮を誇つた横濱市が、一夜の中に灰燼に歸して、焼野を現出したことは、實に遺憾なことであつた。罹災戸數は、災前約九萬三千の内、焼失約五萬六千、倒潰約一萬八千、計七萬四千の多きに上つたことで、少くとも元の横濱市は、殆んど文字通りに全滅した譯で、開港六十有餘年來、營々築き上げた街も、整頓した港灣設備も、凡て影を沒し、横濱市全財産は烏有に歸したのであつた。北は野毛山

伊勢山御所山南は、山手町北方町の丘陵地にまでも廣く連なつて、見渡す限り荒寥たる焼野原と變じ、所名も判らない程になつた。異國情景の漲つてゐた山下町山手町一帯も、會社商店等軒を並べ、車馬の交通が盛んであつた商業中心の關内各街も、市民行樂の巷であつた伊勢佐木町界限も、悉く消え失せて、残るは僅に神奈川子安の高臺、久保山の高臺、藤棚方面、中村町の高臺、岡村弘明寺井土ヶ谷方面、淺間町輕井澤方面、磯子瀧頭堀ノ内根岸本牧の高臺等、場末又は丘陵地の街々ばかりであつたが、その廻も全潰れ半潰れの家屋が多く、満足の家屋は數ふる程しかなく、横濱はまるで黒船來航以前の一漁村の横濱に歸つたやうな寂しさがあつた。誰か大息をしない者があらう。海岸から望見すると、残つた家がないと、震災後三日横濱を視察した大藏内務事務官の復命書に認めてあつたのは、決して誇張ではなかつた。而し當時市の復活は誰が考へても、容易ではなと思はれたばかりでなく、港灣設備の破壊と貿易機關の全滅とに因つて、横濱港の生命である生絲輸出の商權も、或は神戸港に移るのではないかと不安を抱いた人もあつた。さて震災後の市中で焼け残つたのは、社會館中央職業紹介所、海外渡航検査所、壽小學校、三井物産會社倉庫、川崎銀行税關新港倉庫、高島驛、澁澤商店倉庫等の建物や、内部を燒盡した不燃建造物なる縣廳市役所、露亞銀行正金銀行開港記念會館、基督教青年會館

中央電話局横濱驛農工銀行專賣局倉庫横濱海上火災保險會社十五ビルデング岩井商會野澤屋吳服店等の殘骸が寂しく立つてゐるばかりであつた。港内にはいつも無數にある外國客船も貨物船の姿も見えなかつた。道路には、焼けた電車や自動車などが所々に倒れてゐた。その間に慘死體が轉がつてゐた。馬車道には、焼けた電車の中に焼け死んでゐるものがあつた。護岸の崩れたところにも、溺死體が無數横はつて心地悪い異臭が四邊に漂つてゐた。是等慘死體の集團した場所と其の數を舉ぐれば、吉田橋附近に八百十五、柳橋附近に百四、東本願寺別院附近に百十八、同境内に百七十三、末吉橋附近に三百八、宮川橋附近に百六十二、省線敷地内に四百餘、正金銀行附近に百四十、川崎銀行附近に八十、南太田町天神坂に二百七十五、吉濱町空地に九十二、大江橋より都橋までに百十七であつた。夜は一層物凄かつた。全市は人間が住む所でなく、死の國である様に、恐ろしく静まり返つてゐた。暗黒の燒野原には所々に殘火が燃えてゐた。いふまでもなく大震災被害は、東京横濱の二大都市に最も激しかつたのであるが、特に横濱の慘害は東京よりも、一層ひどかつた。東京と比較をする譯ではないが、火災を免かれた地域に於ける全潰半潰の世帯數は一萬百五十八で、横濱市は二萬五百三十二であつたことに依つても解るわけである。兎に角、東京にては所に依りては避難する

まで猶豫があつたが、横濱には全然猶豫はなく、命からかく逃げたのが事實である。

第四節 被害の諸計數

こゝに被害の概要を具體的に記述する。横濱市の全面積は約千四百四十萬坪であつて、其の内、宅地が四百九十萬坪を占めてゐるが、今次の大震災に因る被害總面積は三百九十萬坪で、宅地面積の約八割に當つてゐる。家屋燒失區域が五割八分で二百八十萬坪、倒潰區域が二割二分で百十萬坪である。災害は全市に亘つてゐるが、中樞地たる關内關外を始め、山手、蒔田、戸部、平沼方面の一帯は火災の爲めに烏有に歸し、根岸、本牧、子安、神奈川の方面は一部燒失した。斯くて市内住居の約六割は燒失、約二割は倒潰して、殘存住家は僅に二割に過ぎない。其れも多少の損壞は免かれなかつた。其の被害を數で現はせば、災前の戸數九萬三千八百四十の内、燒失住家數五萬五千八百二十六、倒潰住家數一萬八千四百九十九、計七萬三千九百七十五を算し、更に罹災人口では、災前四十四萬八千五百四十大正十一年十二月調査の内、四十一萬二千二百四十七となるのである。此罹災人口は震災地一府六縣全體の罹災人口三百四十萬四千八百九十八の一割二分を占める。震災地全體の人口一千百七十五萬八千に比べると、僅かに四分四厘の人口にしか當ら

ない。横濱市が罹災人口に於ては震災地罹災人口の一割二分に當るのであるから、横濱市は他の震災地に於ける被害平均の三倍弱に當る被害を受けたやうなことになるのである。港灣設備の損害中、其の主なるものは、繋船岸壁には總延長一千百間の中、一元のまゝのもの、僅に二百二十九間で、其の他は全部崩落した。大棧橋は全長二百七十二間の中、前方の兩側擴張部二百二間を危く残して、他は悉く破壊し、陸地との連絡は遮斷された。防波堤は東が九百間、北が千百三十間、計二千三十間あつたが、其の中東五百間、北二百三十間、計七百三十間が平均八尺沈下し、突端の兩燈臺も十一尺沈下した。市内に於ける建物の被害に就て記せば、市内の諸官衙公署其數四十三の内、神奈川縣廳、横濱税關、横濱地方及區裁判所、航路標識管理所、生絲検査所、絹業試験所、横濱稅務署、横濱郵便局、横濱櫻木町驛、縣測候所、横濱市役所、市立圖書館を初め、三十三は焼失して、残存したは神奈川驛、横濱市電氣局、市立萬治病院、神奈川警察署等僅かに十で、而かも何れも半潰の程度ばかりである。英國、米國、佛國、伊國、支那を初め、二十六箇國の領事館は全部焼失した。市内小學校三十六の内、焼失十七、全潰三、一部焼失一部倒潰一、其の他大部分大破、兒童の死者九百十六人を出だした。其の他横濱高等工業學校を始め、各種男女の中等學校、大小の私立學校等、其の大半は罹災した。伊勢山太神宮、巖島神社、増徳院、玉泉寺、東福寺、野毛不動堂、東西兩本願寺別院等を初め、多數の神社、佛閣、各宗派の教會堂も烏有に歸した。各新聞社並に其の支局、市立十全醫院を初め、難波近藤渡邊等の各病院、グランドホテル、オリエンタルホテル、テムブルコート等外人向及國人向の旅館も多數焼失した。横濱座、喜樂座、數多の娛樂場、一流呉服店も烏有に歸した。災前三百二十六を算した諸會社銀行、其の主なるもの、日本郵船、大阪商船、東洋汽船、パシフィック、クヌーメル、シヤードンマ、デソンスタンダード、石油ライジング、サン石油、原合名、キリンビール等の諸會社、正金與信、左右田、辛酉農工、渡邊第二、平沼、商業、臺灣、第三十五住友、香港、上海、インターナショナル、露亞等の諸銀行、(以上本店)横濱取引所を初め、其の數三百九、即ち九分通り焼失した。更に工場に就て見るに、災前市内に在つた工場約三千の内、約二千七百即ち九割は焼失したのである。土木方面に關しては、二百六の橋梁中、七十四は被害を受け、全墜落六、全燒三十四に及んでゐる。崖崩れ約五十箇所、護岸の崩壞約二萬間、總延長の約四割に達してゐる。而して市の地盤は平均一二尺低下したやうである。死者の數は二萬一千三百八十四人、行衛不明者の數は一千九百五十一人、重傷者の數は三千百十四人を算する。當時陸路又は海路に依る避難者は頗る多く、災前約四十四萬二千の人口中、直後には約其の半數が郡部及他府縣に赴いたと想はれるのであるが、其の實數は計

上し難い。災後程経たる十一月十五日の調査に據ると現存者約三十一萬一千人を算したによつて見ても、其の大體は推知し得るのである。殊に外國人の他地方に立退いた者は極めて多く、災前に於て支那人約五千人、歐米其の他の外人三千百九十四人、計約八千人であつたのが、九月中旬の調査に據れば、現存者僅に支那人百三十一人、他の外人百九十八人、計三百二十九人の少數に激減した。右の内支那人の特に激減したのは約二千人の死者を出だしたのも之に入つてゐるからである。若し夫れ建物及有らゆる財貨財産の滅失に因る損害額は、出來ないのであるが、其の中調査し得た分のみを舉ぐれば、貿易業者の損害高は蠶絲の九千八百四十七萬九千餘圓、此中生絲の燒失に因るもの約五千五百萬圓餘を筆頭として、合計一億四千三百六十五萬四千圓を算し、内國商工業者の推定損害高は合計四億二千七百九十五萬二千餘圓に上ぼつた。尙別に調査した工場法適用工場の推定損害額は、二億四千三十四萬圓を算する。港灣に關係ある倉庫並上屋の損害坪數は、災前總計七萬五千百三十六坪の内五萬八千五百五十五坪即ち約八割に達した。我横濱市役所關係の有形損害額でも概算三千一百萬圓に達し、此内水道事業費の損害だけでも四百二十五萬五千餘圓を算する。一例なれども電車百四十三輛中燒失及大破九十一輛を算した。斯く列舉し來り見ても、我横濱市の被害は第一位を

占めたのであつて、當時世人が其の慘狀を形容するのに『全滅』と二字を使つたのも最もなことであつた。

附 横濱市大震大火災の公報

九月三日、神奈川縣知事より内務大臣に申告した被害状況公報は、災害直後に於ける横濱市の状況を髣髴とせしめる好資料であるから左に記載する。

横濱市に於ける本月一日の震災は、全市火の海と化し、市民若干は身を以て難を免る。其の慘禍たるや到底夢想だも爲し能はざる底の悲惨事にして、一瞬にして天空冥漠、骨肉相別れ、死生を異にするが如き状態なり。而も全市の震災は時恰も陰曆二十十日の厄日前に際會し、烈風火を吹き、火焰瞬時にして全市に擴大し、避難民は殆んど行く處を知らざらんとす。仍て身を以て免れたる當廳員を以て、臨時救護所を横濱公園に設け、警察部長は警察部員巡查をして各署長に非番巡查の召集を命じたるも、公園集合地に集まるに先ち、すでに諸所に發生したる震災は、交通を杜絶し、集合自由ならず、而も餘震は絶えず繼續し、揮發物爆發物は、巨彈を放つが如き香煙を發し、爆發管亦飛散し、殆んど戦争の状態と何等異なることなく、爲めに人心胸々として、殆んど死生を知らざるが如き不安の間に夜を徹し、警察官も亦殆んど不意の天災にして、如何とも手の施すべき手段なく、辛うじて警察官を以て避難民を保護警戒せしむると共に、負傷者の手當を施したるも、材料及醫師に乏しく、遺憾の間に天明を待つ。當夜の市民は附近の公園廣場又は高所等を選び、萬一の徳伴を冀うて避難したる者、逃走したる者、渺からず。而して當夜の避難民は、市公園に約五萬、掃部山伊勢山に約一萬、本牧三溪園附近磯子方面久

保山等に約一萬づゝあり。其の他互に先を争うて適所に難を避けたるもの尠からざりしも、煙に捲かれ若くは焼灼に堪へずして、河海中に身を投じたるも遂に溺死したる者實に尠からず。其慘狀たるや實に筆紙に盡し難し。被害の程度は其の慘禍擴大にして調査する能はざるも、戸數八萬五千中殆んど九分焼失又は倒潰し、死者約十萬、負傷者無數なるべしと思料す。而して官公署の如き殆んど一として存在するものなし。横濱地方裁判長及検事正代理、福鎌検事其の他判事及税關郵便局の高等官中にも多數の死者あるべきも、未だ判明せざるもの多し。震火一度到り、餘震尙去らず、海嘯來襲の謠言盛に行はれ、人心安定せず、然も其の間生死不明の家族が互に之を搜索するの狀態は、殆んど現世に於て再び見る能はず。隨所に起る哀話悲語は流涕聽くに堪へざる事而已なり。然れども他而縣下郡市の交通々信の杜絶に依り、之を知る能はざるも、縣下到處其の慘禍の激甚なるは想像に難からず。仍つて差當り人心の安定、食料の供給は、最も急を要するも、之を市中より需むる能はず。濁水を飲み、僅に飢餓を醫するに過ぎず。已むなく横濱船渠會社の貯米を開放して、之を罹災民に供與したるも、何分飢餓に煩せる罹災民は、平穩適切なる分配を受くる能はざるも、罹災民の共同生活的觀念に依り、幾分か市は之が配給を受けたるが如しと雖も、食料問題は時々刻々に其の必要に迫られつゝあり。依つて廳中より職員を簡拔して上京せしめ、陸軍大臣第一師團長に出兵の要求を爲し、兼て貴官に口頭を以て報告せしめたる通りなるが、震災の翌日二日は人心不安を除去する能はず、各所に掲示して謠言流言の打消罹災民の救助傷者の應急處置に努め、一面物資の來着を待つよりは寧ろ物資の需給上可能性を有する郡部に避難するが得策なるを力説して、漸次避難せしめつゝあるも、交通杜絶され、また市民は疲勞困憊せるを以て、意の如くならず。止むなく船舶を徴發して、靜岡及大阪神戸地方に輸送を開始せんと欲し、努力中なると共に、當港碇泊船、コレア丸の無線電信を利用し、大阪兵庫の長官に糧食の配給を依頼せり。

第五節 罹災民の避難

罹災した市民達は、倒潰した家を踏み越えて、黒煙の中を潜ぐり抜け、生命からく、最寄りの公園、廣場又は丘陵地に避難して、燃え盛る猛火を眺めつゝ、何の當もなく、夜に入るを待つた。中には逃げ遅れて、河中に飛び込み、橋杭に掴まつて、水を頭から浴びて全身が焼けるやうな熱を凌ぎながら、一命を取留めた者も尠くなかつた。斷崖の上から帯や綱で吊るし上げられ、或は掴まり下りて、危ふく助かつた者もあつた。破壊した棧橋の殘存部分に辛うじて助かつてゐた數百名の者も既に危ふく見えたが、其の附近に碇泊してゐた大船小舟は、極力之が救助に努め、其の大部分は之に收容せられた。岸壁方面でも、其の破壊した際、海中に墜落した者や、關内方面より火に追ひ詰められて來て、絶體絶命の態である者が數百名あつたのであるが、是亦其の邊りに碇泊してゐた汽船の、何れも舷門を開き、艇舟を出だして、救助に努めたので、多くは命拾ひをした。避難地の主なる場所は、横濱公園、山手公園、中村町乃至根岸、本牧の丘地、磯子瀧頭の畑地、久保山水道、山掃部山、高島山、神奈川臺等の丘地、新山下町の埋立地、東横濱驛、高島驛の構内等で、人數の多い所は三萬人にも四萬にも達した。横濱公園は、市の目貫場所にあつて、相

當廣くもあり、屈強の安全地帯と目されて、園内、園外の避難者殺到して、其の數四萬と註せられてゐたが、園内は忽ちにして四面環火に陥り、何れも熱氣身に迫るの苦を受けたのみならず、飛火は遂に園内の建物を冒して、一同の危懼は一方ならなかつたが、幸にして園内の一部は、水道破裂の爲に水が氾濫してゐたので、皆々其れに依つて辛くも火熱に堪へ得たのである。正金銀行表門附近の慘狀は、場所柄として特に目立つたのであるが、是れは安全場所として遁げ込んだと云はよりは、火に追ひ詰められた結果と看做されてゐる。

第六節 災後の悲劇

炎塵に蔽はれて銅色に見えてゐた太陽も、漸くにして没し、代りに出でたる初秋の月は、不思議な積雲キヨラスの間に、見えるやうになつた。火焰も次第に薄らいできた。各所の安全地帯に逃げてゐた罹災者たちは、夜の明けるを待ち兼ねて、餘燼が燻ぶつてゐる街々に歸つて自分の家を探し、家人を尋ね廻つた。死んだと思つてゐた父や兄弟姉妹などと偶然出會つて喜ぶ者もあれば、或は己の骨肉が無残にも焼死してゐた姿を見つけて、死體に抱きついて泣き入るものもあつた。

第七節 震災後の不安

凡ての財産を灰にした、四十萬の罹災民は、忽ち衣食住に窮した。残暑の折柄、衣と住とは姑く忍ぶとしても、食糧及飲用水の供給は得なければならなかつた。中には東京方面は是程であるまいと、時を移さず救援に來るだらうと思つてゐた者もあつたが、東京もまた全滅同然だときいて落膽した者もある。三日、災後初めて驟雨のおつた際など、何れも天を仰いで其れを吸ひ、蘇生の思をなしたのであつた。一日二日の絶食ぐらゐは誰も、彼も體驗したことであつたが、兩三日を経て後は、縣市幹旋の下に港内碇泊の船舶より食糧の配給があつた。場末の殘存地域及接續町村の此處彼處からも食糧を配給した。又船渠會社倉庫の在米も開放せられ、程經て五日となつては、横濱倉庫内に在る政府所有の外米も配給を始められて、各地方からも食糧が送られたので、一同は餓から助かつた。倉庫開放の際には、群集が押しかけた爲めに、若干の死傷を出だした。港内の船舶に收容された人々は、何れも船内で養つて貰つた。二日、税關構内の焼残り倉庫で掠奪が行はれ、引續き、根岸本牧神奈川其の他の殘存地域に於ても、亦同様の事があつたのは遺憾であつた。

第八節 災後の善後施爲（其の二）

市民の不安の夜は明けて、二日、震災地一帯に戒嚴令を布かれて、横濱には四日、奥平少將の率ゐる三箇聯隊が到着し、市内の各要所を銃剣で固めて、人心の安定を圖り、秩序の維持に努められた。此日群馬縣からも、警察官百二十七名を以て成る應援隊が第一著に繰込んで、警察力を補充した。二日深更、横須賀鎮守府よりは、逸早く軍艦五十鈴及驅逐艦二隻を派遣し來り、陸働隊を組織して、新山下町埋立地に上陸し、警備と共に救護を始めた。引續き第三艦隊が來航して、食糧の陸揚支給警備救護等に努力した。尙ほ二日、臨時震災救護事務局が設置され、四日横濱に其の支部を置かれて、三矢内務監察官其の他事務官以下の吏員約三十名來着して、櫻木町の殘存建物内で事務を開始した。初めて市役所は廳舎罹災の直後、居合せの吏員を以て取敢へず、假事務所を横濱公園内に設けて、救護事務を開始したが、三日、假廳舎を櫻木町の中央職業紹介所に設け、同日縣廳も同じく假廳舎を櫻木町の海外渡航検査所に置いて、何れも市長以下吏員總出の下に、各部署を分けて、組織的に救護事務を開始した。斯くて櫻木町は救護事務局支部、縣廳市役所三廳舎の設置に因つて自から縣市救護事務の中心地となつたと同時に、又縣市

行政事務の中樞地ともなつた次第で、慰問の諸名士、關係諸員が來て、車馬の往復晝夜絶えず、其の光景は戦地に於ける司令部の觀があつた。直後最も必要な仕事は、罹災生存者を飢渴から救ふこと、傷病者の救護と、人心の安定を圖る事とにあるので、乃ち先づ此等の事に主力を注ぎ、無電急使等により、政府筋に急ぎ申告して其の援助を請ひ、物資豊富なる關西の諸府縣市に向つて、米穀、副食物衛生材料其の他應急物資の供給を依頼するの一方、取敢へず市内の殘存地域其の他近接町村に吏員を急派して、食糧の蒐集に努め、殘存倉庫及碇泊船舶の在米を配給するの準備を爲し、飲用水を供給するの途を開き、又救護所を開設するなど、迅速機敏の方途を講じた。而も直後は容器も舢舨も車輛もなく、又人夫ともなく、仕事と思ふやうに出來ないので、何れも大に困惑したのである。救療所として取敢へず高島町の社會館外、場末十數箇所に殘存した病院、學校等を之に充て、罹災醫師を募つて、其の係員に囑したけれども、數千數萬の傷病者に對して、藥劑や手術具などの揃はう筈なく、場末の倒潰した藥舗を發掘して其等を取だすなど、或は倒壊材を以て擔架を造り、カートテンを裂いて、繃帶を製しなどして、辛うじて、間に合はせるといふ有様で、其の苦心は一方でなかつた。尙又假廳舎を開いたとは云へ、場所極めて狭き爲、廊下土間の別ちなく執務所に使用し、机や椅子なども不足なので、有合せの

ビール箱や石油箱までも之に充て、一本のペン、一枚の紙にも事缺くといふ有様で不便其困難や推して知るべしである。されば何れの應舎も、後に急造假舎を建て、假机や假椅子を造り、漸くにして補ひをつけたのである。當時は、係員の中にも罹災者多く、住居や家財を滅失したは固よりのこと、青木助役や横田主事の如くに、家族を喪つた向も尠からずあつたのであるが、此秋、此際、市長以下雇員備人に至るまで、何れも一様に心から盡したのである。此間、重要事務に關しては、會議を開く必要あるので、災後初めての市會は十一日に於て開き、爾後も屢々開會したのであるが、毎に假應舎屋上の露臺に於て之を開いて審議を凝らしたのである。三日、市長より關西の主要府縣知事、靜岡縣知事、並に神戸市長に宛てた無線電信の電文は、當時の消息がよく知れることだと思ふから左に記する。

本市危急に瀕しつゝあり。食料品衛生材料自動車水ガソリン大工道具大形炊事用具薪提灯萬年筆紙墨膠寫版同附屬品一式懐中電燈蠟燭等の供給に就き至急何分の御配慮を請ふ。

更に六日、市長より内務大臣に宛てた電文を記する。

市内の惨狀今尙目も當てられず。手不足の爲、生活必需品の配給すら手配届かず、人心益々險惡に陥り、且つ衛生上にも山々しき心配あり。左記の事項御含みの上、速に御配慮を請ふ。

一、戒嚴令を布かれ、軍隊の派遣を得たるも、兵力不足の爲め、兇徒所在に出没し、市民は各自々衛の爲め、武

器を携帯し、殺伐の氣全市に滿つ。速に兵員を増加せられんことを請ふ。

二、食糧は船便にて續々入港するも、小舟、船員及燃料不足の爲、陸揚難澁を極め、且つ配給に當るべき人夫なく、困難甚だし。

三、避難所の建設は目下の急務なるも、大工及用具なく、困難を極む。

四、道路橋梁等全部破壊したるも、人夫及用具なく、應急施設を爲し難し。速に工兵の援助を仰ぎたし。

五、現金皆無。速に送金を願ふ。

六、飲料水困憊を告ぐ。

七、此際或るべく多數他府縣へ避難せしむるを得策と思考す。仍つて京濱及清水港へ連絡御手配を願ふ。

尙之より先き五日、内務大臣に宛てた電請を記す。

現金皆無日々支拂に差支へ居るにつき、現金一萬圓借用したし。成るべく補助貸にて至急貸付方御手配を請ふ。

第九節 罹災民の應急行動

斯くて五日となり、六日となつて、秩序は稍々回復し、不安も漸く除去された。罹災民の多くは、焼けトタンや煉瓦片や倒潰材などを拾ひ集めて、或は我家の焼跡や或は丘や、廣場に假小屋を立て住んだ。墓地附近では卒塔婆などは假家材料として使用された。立往生した儘の壞れ電車などは、眞つ先きに占領されてしまつた。九月十日前後に於

ける避難場所及其の人員の概数を列擧すれば、神奈川高等女學校に八百人、青木小學校に六百五十人、稻荷臺小學校に一千百人、第一中學校に一千二百人、横濱商業學校に一千人、石川小學校に一千人、お三宮第一日枝小學校に三千人、北方上臺早苗幼稚附近に一千人、根岸競馬場に一千人、横濱公園内に一千人、中村町の遊行寺に七百人を算した。以上は市内のみの避難場であるが、郡部に避難した者も多かつた。斯くて、富めるも貧しきも、當初の程は一樣に假家の中に起臥して、市役所や村役場からの配給品に依つて、生活を繋ぐの外はなかつた。此の見窺らしき假住居こそ、實に市民復活の第一歩であつて、永く子々孫々に語り傳ふる物語である。斯くて幾十日かを經て、何れもは更に半永久的の假家を元住みし地に建て、或は縣市其の他に依つて建てられたバラック式の假家に漸次に引移つたのである。尙又五日六日の頃ほひには、政府筋の艦船や各汽船會社の船舶が、新山下町の埋立地を臨時の埠頭として、避難旅行者の無賃輸送を開始した。鐵道も、工兵隊鐵道隊等の手に依つて應急修理を遂げられたので、六日には神奈川驛、七日には横濱驛、何れも廢殘の驛舎を基點として、漸くにして汽車を通ずることとなり、是亦無賃輸送が開始されたので、或は郷國に歸らうと、或は職を求め、爲めに、各方面さして避難旅行する人が多かつた。であるから、埠頭や驛頭は、是等避難者が澤山集つて雜沓

を呈した。當時汽車に依つての避難者数は計上し出来なかつたが、軍艦で避難した者の数は二十一日までに約七千七百人、汽船で避難した者の数は、四日發郵船コンドン丸で大阪に向つた八百三十名を先頭として、三十日までに四萬一千八百九十五人を算した。其の落付先は、關西地方で、神戸や大阪に往つたのが最も多く、外人は、多くは、艦船に乗つて神戸に赴いた。以上罹災者の中、市内の殘存地域、其の他に假住ひした者の数は分らない。災後程經た九月廿五日調の計數は、親戚知己を頼つて、若くは手藁を求めて假住ひした者一萬四千八百九十二世帯、六萬百八十三人、バラック天幕其他に假住ひせる者一萬七千三百五十三世帯、八萬五千七十五人、計三萬二千四百六十六世帯、十四萬五千二百五十八人を算した。右の外、本市以外の本縣の市郡及各府縣へ避難してゐた本市の數は、災後七十五日を經たる十一月十五日社會局の調査に據れば、總數十一萬四千三百一人で、其の内五千人以上滞在してゐた地方は、本縣下に二萬一千四百六十八人、東京府下に二萬四千二百七十二人、内東京市に七千六百三十四人、郡部及八王子市に一萬六千六百三十八人、兵庫縣下に一萬一千七百一十一人、靜岡縣下に七千六百十四人、愛知縣下に五千二百八十八人、大阪府下に五千四百五十六人を算した。直後に於ける最多の時は、恐らく二十萬人にも達したことゝ想はれる。

第十節 皇室の御救助 各地から救援救護

横濱大慘禍の情報は、當日恰も碇泊中であつた、東洋汽船會社の所屬船コレア丸の無線電信に依つて、先づ大阪神戸等に放送され、一日の夜から二日にかけて、神戸から全國各地に報知し、二日三日にかけて、日本の大震災を普く歐米諸國に傳へたのであつた。當時コレア丸に於て無電を放送することゝなつたのは、森岡縣警察部長が身を海中に投じて附近の汽艇に泳ぎ付き、更にコレア丸に駛せつけて、放送方を依頼したに因るのであつた。尙本市長よりは、本市危急の旨の無電を米國桑港に放送した。

畏き邊りにおかせられては、今次の大凶災を御診念遊ばされ、三日御内帑金一千萬圓を下賜あらせられて、一府六縣下に於ける罹災民救済の資に充てさせ給ふた。横濱に割當の該金額百四十七萬七百八圓は、後普く罹災民に配與せられ、何れも熱き涙を流した。直後侍臣を派遣せられて、被害状況を視察し、後慰問を下された。のみならず、十月十日には、畏くも攝政殿下は行啓あらせられ、市内の主なる被害個所を、御視察御慰問あり、更に十一月五日には、皇后陛下行啓あらせられ、親しく災害状況を御視察、假病院にまでも玉歩を運ばせられ、御慰問遊ばされた。尙市内の罹災社會事業に對して御下賜金

あるなど、其の御仁慈の篤きには、誰とて感泣しない者はなかつた。各皇族殿下にも前後して御成あり、御慰問遊ばされた。關東大震災の急報が、無線電信、飛行機、其の他に依つて全國各地に達した時、國民の驚愕と憂慮は一方でなかつた。東京横濱横須賀等を初め、幾多の町民が斯やうな大慘害に遭つたことは、未曾有の大凶變であるとして、何れも深く同情して、内地殖民地の津々浦々にある人まで種々の品物を送つて來た。又地方からは救護隊を組織して派遣して來た。引續いて救援費の支出を議決し、食糧被服其の他救護物資の調達輸送、義捐金品の募集を爲す等、適切の道が講せられた。斯くて三日四日以來、是等官公私團體から派遣された救療團、救援隊は、夫々救護材料を持つて、災害地に行き、救護事務局戒嚴司令部府縣郡市、其の他と連絡を保ち、其指圖に従つて、各地各方面に亘つて、應急救護の事に著手した。是等團體の主なるものは、府縣郡市町村、府縣の警察隊、在郷軍人會、青年團、消防組、赤十字社、支部、愛國婦人會、支部、濟生會、支部、協調會、醫師會、看護婦會、各宗教團體、學生團體、各大會社の救援團等で、其の團員の少いものは十名内外から、多いのは數十名であつた。引續き海陸兩方面から米穀其の他の救護物資が續々到着した。用のない者が多數入込むことは、食糧を無駄にするばかりでなく、混亂を増すことともなるので、各地方當局では嚴重にこれを禁止した。災害の横濱

はいふまでもなく、交通通信の機關が全く絶えてゐたので、救援を頼むことが遅くなつた。救援は東京に先立たれ、配給品も先づ東京に輸送されたのであつたが、横濱の被害は東京以上であることが知れ渡ると、早くも別働隊を組織して來濱し、續いて各地からも陸續救援隊が來たのである。配給品も同様到着した。斯くて是等の救援隊は協力して、傷病者の救療物資の配給、罹災者の慰問、焼跡の整理及警戒警備等に活動した。救援隊は多くは九月中旬より下旬にかけて引揚げたのであるが、尙長く留まつて、活動を續けた者尠からずあつた。此間畏き邊りからの思召に依り、宮内省から特に救療班を差遣せられて、傷病者の診療に従事せしめられた。菊花御紋章付の自働車が、醫員看護婦を載せて、焦土の市内を走るのを見た市民は、皇室の御仁慈心に喜び申上げた。各地各方面からの救援隊が、或は天幕の病院内に、或は荒れ果てた街頭に、何れも苦心して連日連夜の努力を續けつゝある容子を見ては、人々は謝意を表した。尙各地方からの救援は、罹災者の總てを其の對象として、誰彼の差別なく行はれたのであるけれども、中には一般救援を爲す外に、特に或縣或市の救護團をも設けて、其の地出身の罹災者に持つて來た慰問物品や、見舞金を與へた。人事相談、歸國の斡旋等を爲し、或は出身者の安否を訪ねて、郷里に報告することに努めたものもあつた。其れを出身者に知らせる爲め

の廣告が市内到る所に貼られてあつた。大震災に對する各地の同情は大きなもので、義捐金の募集、物資の調達に極力運動した。多數の避難旅行者に對しては、多數の者が鐵道の驛々や、港の埠頭や、街道筋の要所要所に、晝夜出勤して、慰問、救療給與案内、宿泊進んでは人事相談、就職の紹介、學生の轉學入學等までも親切に世話をしてくれた。當時の避難旅行者は我横濱市民が十餘萬人あつたのに拘はらず、一人として厚意に浴しない者はなかつた。尙又關西の諸府縣にては、震災地救濟の爲め、關西府縣聯合を組織して、住宅の供給や、病院を建設し、應急救護に盡した。其の他締盟諸外國も、日本に對し深い同情を寄せて、見舞金、食糧被服衛生材料、運搬用具、建築材料等多額を寄贈して來た。英米佛支等の東洋艦隊は、東京灣内に集つて、救援物資の輸送、或は假病院の建設に、或は慰問等に特に多大の力を盡してくれた。人種の區別もない尊い他國人の眞の同情に對して、吾人は心からの感謝を表するものである。又各國中移住の我同胞からも、多大の同情救援を寄せ來り、横濱の罹災者も亦齊しく其等の好意に浴したのであつた。斯くて内外各地より寄贈された食糧品被服類、建築材料其他の物資は、海陸兩方面より續々到達し、埠頭に驛頭に山積して、罹災者の心を強からしめた。

當時全國各地より來濱した救護團の數は頗る多く、其の主なるものゝみでも一時は

八十以上に及び、更に其中救護機關のみでも、日本赤十字社神奈川支部施設の分を合せ、一時約四十を算し、到る所にテント張りの救療所が設けられた。其等の活動した成績は、悉くは調査してないが、單に日本赤十字社神奈川支部の施設した一病院外十四救療所に於て取扱つた成績のみでも、九月二十八日までの延人員外科三萬九千九十七、内科三萬一千二百二十八、其の他一千七百三十、合計六萬六千五百五十五の多きに上つたのである。災後程なく米領比律賓より來援した赤十字團、之に代つて米國本土より來援した赤十字團の活動も亦頗る目覺ましく、新山下町埋立地には、其の大規模なテント病院が幾棟となく設けられて、其の坪數一千二百坪に涉り、異彩を放つてゐた。

第十一節 災後の善後施爲（其の二）

災害直後の應急施爲に就ては、概略は既に記載した。爾來市當局は、引續いて救護事務局縣廳其の他關係諸方面と力を協せ、各府縣から來援の諸團體とも連絡を保つて、益々救護の歩を進め、物資の配給、傷病者の救療、避難旅行者の斡旋、焼跡の整理、交通水道照明各機關の恢復等に關して迅速適當な道を講じたのである。又災民持久の生活を保護することにも盡瘁し、各方面の助力を得て、バラック住宅の建設、治療所、職業紹介所簡易

浴場、廉賣市場等の設置、衛生教育社會事業等の恢復に至るまで、協力盡瘁した。

一日午後四時頃、遂に市廳舎が焼けたので、市幹部以下、居合せの吏員を以て、取敢へず假事務所を、横濱公園内に設け、先づ災害の實情を報告して、救濟を仰ぐべく、吏員を内務省に急派すると共に、應急救助を近接町村に請ふた。傷病者に對しては、市立萬治病院から醫員を招き、二日よりは、救療に従事せしめた。三日より市廳假事務所を中央職業紹介所に移し、廳員全部を召集し、部署を分つて直に救護事務を開始した。救護事務は多岐多項に涉るのであるが、其の主なる數項に就て概畧を記るせば、食糧の供給に關しては、二日港内に碇泊せるバリ丸積込の外米を徵發して、三日より陸揚を爲し、市内を七方面に分つて、市會議員有志者及吏員を方面委員に依囑して、之を配給した。續いて横濱倉庫内に在る政府所有の外米をも配給した。此間船渠倉庫の開放されたことは既に述べた通りである。七日大阪府及兵庫縣から寄贈の米穀が到達したを最初に、其の後各府縣から米穀其の他の食糧品が海陸兩方面から續々入つて來て、漸次豊富を告げたのである。之が運搬及陸揚作業は、陸海軍筋の手に依つて爲されたことで、其の努力は實に多大なものであつた。秩序が回復してからは、七方面に分けて、數十の救護區域となし、市會議員青年團長衛生組合長等を其の代表者として、食糧其の他救恤品の配給

を公平ならしめた。其の後又公設市場十數箇所を設け、購買の便を計つた。而して災民の依頼心を除き、復興意氣を發揚させる爲、一般の配給は九月二十七日限り斷然打ち切り、翌日からは自力又は他の扶助に依つて生活の出来ない者に限り、配給を續けることとし、更に十一月二十一日よりは、一層配給の版圖を縮少し、五個所の配給所を設けて配給することとした。一面就職に關しても可及的の便宜を與へて、自活させる道を講じた。食糧其の他の物資の配給に就いて焼け残つた町内の青年達の活動は、實に目覺ましきものであつた。直後組織せられた誤まつた自警團は、其の態度を變へて、何れも熱心に配給事務に助力したのである。

飲用水の供給に就ては、取敢へず水を港内碇泊の船舶に求めた。井水は検査を行つた上、之を使用せしめ、更に二臺の撒水用自働車を以つて供給した。十月四日より水船を使つて各所に供給した。船舶より供給を得た水量は、九月十日マラッカ丸よりの百三十噸と、同二十八日まで二十三日、隻一千四百四十五噸との多量なものであつた。十月十日野毛山貯水池より都橋畔に至る水道工事が完成したので、自働車に積載して日々一千石づつ配水が出来るやうになつて、爾來漸次復舊に近づいて來た。

道路橋梁其の他交通機關の復舊に關しては、先づ主要道路の修繕及障害物の除去に

努むると共に、破壊焼失の橋梁中、通行の要衝に當るもの、假架橋に著手し、築地橋は六日、平戸橋は八日に何れも竣成を告げたのを最先として、他にも漸次に開通し、何れも車馬の通行が出来るやうになつた。内電車も其の復舊を急ぎ、十月二日、神奈川馬車道間の開通を見たのを魁に、漸次復舊に近いた。此等の作業は主として陸軍工兵隊の手に依つて爲されたもので、其の活動は實に目覺ましいものであつた。

傷病者の救護に關しては、既述の如く二日取敢へず萬治病院の醫員を招いて、救護所を公園内に開いたのであつたが、傷病者は數千もあるので、到底手に負えなかつた。縣當局と協議の上、極力救護所の設置に努め、四日には社會館救療所の外十箇所を設けることが出來た。斯くして六日には大阪府の救護班を始めとして、各府縣から救護班も續々と來た。米國赤十字社寄贈の大天幕病院及關西府縣聯合寄贈の大病院、何れも多大の活動を爲したのであるが、其等の事務は總て縣に委ね、市としては、主として傷病者の調査及び收容に従事した。傳染病の豫防に關しては、特に十分の努力をした結果、患者は豫想外に少く、恐るべき傳染病を發さなかつたのは幸ひであつた。

罹災者を收容すべき公設バラックの建設に就ては、先づ收容を要すべき者を調査し、市の取扱ふ分と縣の取扱ふ分とを區別して、近縣より數多の大工及青年團を招致し、縣

市相呼應して夜を日に踵いで建設を急いだ。尙數箇所焼けた小學校に在る罹災者を收容するに當つては、取敢へず假小屋を建て、補ひをつけた。公設バラックには、國費支辨のもの、關西府縣聯合寄贈のもの、兵庫縣及神戸市寄贈のもの、三井家寄贈のもの、四種類があつて、十二月末日までに縣及市に依つて建てたバラックの數は合計五百五軒、三萬七百四十四坪、其の收容世帯八千九百九十、人員三萬四千九百十二人を算した。關西府縣聯合寄贈の公設バラックで集團的大規模なのが、中村町の揮發庫跡に建設されたのであつた。誰云ふともなく關西村と稱へられ、村役場學校賣店公會堂なども揃つて、頗る異彩を放つてゐた。兵庫縣より寄贈に依るバラック式公設浴場も七箇所設けられた。

失業者の救済に關しては、最も活動を要すべき時期であつたが、職業紹介機關が全滅したので、取敢へず五箇所のバラック紹介所を設け、尙又兵庫縣からも一箇所寄贈したので、九月十七日より事務を開始し、相當の成績を擧げた。

外國人に對しては、其の外人は神戸方面に避難したのであるが、多少殘留者もあつたので、横濱外國人救済委員會と協力して、櫻道下に之が救済所を設置し、市内の居住者のみならず、湘南方面の罹災者をも救済し、食糧品其の他の生活必需品を配給した。

迷兒老人等の保護に關しては、初め市役所の取扱つた迷兒は八十名に達したので、取敢へず之を社會館に收容して保護を加へてゐたが、多くは保護者或は身寄者が取り、残り少數は孤兒院に收容した。頼る邊なき老衰者に對しては、中村町の玉泉寺内に收容所を設けて之を保護した。

生活に困る罹災民で、郷國に歸省し、或は親戚や知邊を頼つて他地方に旅行せんとする者に對しては、鐵道無料乗車券及汽船無料券を與へたが、其の數は十數萬に達した。

災害の狀況が動もすれば誤り傳へらるゝのみならず、流言蜚語も傳へられ、貿易機關移轉の説も亦云爲されて、人々種々の不安に悩まされた。而し其等の真相を報道すべき新聞機關は、全く其の機能を失つてゐたので、九月十一日より市内三新聞社の助力に俟ち、市に於て横濱市日報を發刊し、其の第一號には復興に關する市長の聲明を劈頭に掲載して、市民の奮起を促がし、毎號各方面に配布又は貼付した。各新聞紙の復興するまで十一月下旬に及んだ。尙救護事務局に於ても、其の發行に係る震災彙報の神奈川版をば、同じく十一日より發行した。

屍體の處置に關しては、直後何等用具もなかつたので、漸く六日から着手し、かたまりとなつた死體は、其の場所へで火葬に付し、久保山三ッ澤の兩墓地に埋葬し、二十日ま

では大略片付けたけれども、尙其の後焼跡整理の際、續々發見された。身寄者達も亦夫々處置した。之が處置に際して各宗各派の僧侶達が懇ろに讀經回向した。

港内の岸壁、棧橋等の應急修理は、内務省及陸海軍省の手に依つて爲され、著々進行して、早くも十九日には天洋丸を棧橋に横付けし得るまでに至り、船舶の發着に故障なきことが明かとなつて、港灣復活の曙光は茲に仄見えて來た。聞くに港灣設備の被害は約三割見當で、案外甚だしくなかつたといふことである。

警察警備に關しては、戒嚴司令部憲兵隊、縣警察部及各府縣より應援の警官隊に依つて施爲され、警官隊の數のみでも交代員を合せて八百四十三名の多きを算した。

京濱間の鐵道は、鐵道省及陸軍省の手に依り、六日神奈川驛より七日横濱驛より途中徒歩連絡にて開通し、京濱電車は十一日より一部開通し、省線電車は十月二十一日より開通した。電話も六七日頃よりは各官公廳間に開通し、十五日よりは一般にはあらねど、東京とも通話し得るに至つた。其他郵便は八日より横濱驛前で差立事務を開始し、十六日より一日一回宛の配達も開始された。電信は九日より青木小學校内に於て不完全ながら受付を始めた。電燈も十一日夜には淺間町方面に點せられて、人の心をも明るくした。海軍では早く三日より東京横濱横須賀間の海上連絡を開たし、郵船會社

では二十七日より横濱清水間、鐵道省でも二十八日より横濱清水間の海上連絡を始めると、善後措置は各方面に於て著々實績を擧げたのである。

尙其の他各省各廳に於ても、夫々臨機の善後措置を講じた。其の一例を擧ぐれば、司法省に於ては、横濱區裁判所の管轄に屬する各種の民事々件を處理する爲、市内四箇所と同裁判所出張所を置いて、特に地主借地人、借家人相互の間に於ける各種の紛争簇出し、而かも其の關係や多種複雑にして、法規を以て一律に之が解決を爲す能はざる事情あるものが多いので、主として借地借家調停法に依り、當事者相互の徳義と同情とを基調として、圓滿の解決を告ぐるやう努力した。尙登記回復身分證明、戶籍及寄留籍再製等の事に關しても、夫々臨機機敏の取扱をしたのである。

當時焼跡の整理を始めた時、修繕の見込みのない大きな煉瓦建物は、陸軍の手をかりて、爆發でやつたのであつた。斯くて市内各街の中、港内に面する側の焼け層及壞れ層は、悉く山下町前面の水中に棄てられたが、他は之を利用して、新たに埋立地を造ることになつて約十箇月を費して、其の作業を終つた。之に因つて本市は新に長さ四百五十間、幅五十間、約二萬坪の地面を増加したのであつた。之が作業費は、焼跡整理費百二十萬圓の内約七十萬圓を要した。焼層の如何に多量であつたかは、此一事によつても分

ることである。而してこの新地に震災記念の公園がやがて設けられることになつてゐる。

第十二節 復興の著手 (其の一)

震災直後の本市は元の横濱の姿を失つて、焼野原にでもなつてしまふのかと思はれたが、其の國際市場たり、六大都市の一たる地位の依然としてなくならないことは、猶東京の大半が罹災しても、永久に帝都であると同様に、横濱も日本第一の開港場としての位置は失はない。而して復興事業は一に市民の意氣と努力とに俟たねばならぬとは謂ふまでもないが、政府其の他の同情援助を受けなければ、其の萬全を期すことは出来ぬ。當時渡邊市長平、沼市會議長、其の他有志は、屢々困難を冒して東上し、當路の間に奔走して復興の事に就いて政府の援助を求めべく努めたのである。九日に後藤内務、財部海軍の二相が、山本首相の旨を承けて來濱し、被害状況を視察した。十一日災後第一回の市會を、假廳舎の屋上に開き、横濱市の復興事業は、擧げて市長の自由裁量に委かす旨を、滿場一致を以て悲壯の光景裡に議決した。更に十四日開會の第二回市會に於ては、重要な復興案件を審議々決せられた。超えて翌十五日には市長市會議長井坂

商業會議所會頭及原貿易復興會長の四氏が揃つて上京して、各大臣を歴訪し、帝都の復興と横濱の復興は、同一にしなければならないといふ事を力説し、頼もしい確答を得た。更に其の翌十六日には青木助役及市會議員數名上京して、後藤内相と會見し、救護上並に曩に議決した復興案件に關して打合せをした。其の後十九日には市内の有志三十餘名假市廳舎に會同して、横濱市復興會の組織を議決し、有力有志の人士を全市より網羅して、之が委員に選定し、各部署を分つて、目的貫徹の爲に一同畢生の努力を傾倒することを約した。此間市役所は入港中の軍艦山城に依頼して、港底の調査を行ひ、引續き原田内務技監並に神鞭税關長も、具さに港内を調査した結果、岸壁の被害は唯表面に止まつて、深所の岩盤には及ばなかつたことを發見し、同様棧橋も應急修理の見込十分であるから、港灣設備の復興は案外容易なるべく、貿易港としての價值毫も減殺せられざる旨を聲明して、取敢へず掃海に著手した。早くも十九日には巨船天洋丸が棧橋の残存部に横付けとなつたので、調査の確實なことが證明された。さて市當局は引續き應急救護事務、並に持久保護事務に鞅掌すると共に、一面進んで復興事業の準備計畫に著手することになつた。震災地一般の復興事業に關しては、政府は早くも之が準備を整へ、九月二十七日、新たに帝都復興院後組織を變更して単に復興局と稱すを設置し、横濱には其の出張所を高島

町に置き、市の復興事業中、主として地上及港灣に關する事項に就き、國の經費を以て之に著手することになつて、市の有力者たる原若尾、大濱、平沼、井坂、兎玉、上郎、池田等の諸氏は、何れも復興院評議員を依頼され、其の仕事にあづかることゝなつた。蓋し曩に本市から政府當局に陳情建議したやうに、横濱港市復活の如何は、其の關係單一に都市ばかりのことではなく、延いて國勢、國力にも及ぶことであるからであらう。市當局は爾來復興院、其の他關係筋と、連絡を保つて、銳意益々計畫の施行に努めてゐる。市民の代表たる議員諸氏も熱誠に審議協賛の任を盡し、市當局に助力して、今や各方面の計畫は著々進められてゐる。何れの事業も多くの資金を要するので、其の總豫算として要求される見込み額は、國費並に一部縣費支出のものを合せ、一億六千八百七十四萬圓で、此内譯港灣費一千六百萬圓、鐵道費九百八十二萬圓、電信電話費一千七百十萬圓、道路橋梁費四千三百五十六萬圓、運河費一千七百十九萬圓、下水費四百五十九萬圓、上水道費四百二十五萬圓、土地區劃整理費七百八十四萬圓、公園費二百七十三萬圓、小學校費一千六百萬圓、横濱高等工業學校並に縣立諸學校費四百九十八萬圓、圖書館費五十萬圓、病院其の他衛生費百九十萬圓、塵芥處理場費六十萬圓、社會事業費七十五萬圓、中央市場費四百萬圓、瓦斯事業費三百萬圓、電氣事業費一千三百萬圓、廳舎及公會堂費九十三萬圓の巨額に上ぼ

つてゐる。其の内國家の負擔として、復興局の直接行ふ事業としては、幹線街路、運河、大公園、土地の區劃整理、防火地帯新設等の全部若くは一部で、其の他政府の事業も此以外にある。市の負擔として施行する事業は、前記國の施行する事業の一部の外、上下水道、電氣事業、瓦斯事業、中央卸賣市場、塵芥處分場、衛生教育、社會施設等、其の他一切に亘るのであつて、以上は何れも大正十七年度中に完成の豫定であるが、震災及財政困難の折、これだけの資本を捻出し、或は融通をするは、實に容易でないことであるので、市當局並に議員諸氏、毎に一方ならざる苦心を爲して、奔走を續けつゝあるが、其の結果、市債の總額は、大正十二年度に二千八百三十七萬九千餘圓であつたが、十三年度には五千五百一萬九千餘圓に上り、更に十四年度には七千萬圓以上、十五十六年度を経て、十七年度には一億圓を突破することゝなる。市民の負擔も益々重くなるわけである。

市内の復興状態を見ると、第一に横濱港の生命とも謂ふべき生絲輸出取引の魁となつて復活したことは、何よりも先づ市民の心を強からしめた。市今次の震災では、港灣設備も破壊し、貿易機關も全滅したので、之が回復は至難であると見てとつた關西神戸港の貿易商一同は、機乗すべしとして、從來當港の獨占してゐた生絲輸出の商權をば、此際に奪はうと企て、巧妙に飛躍をはじめ、其の計畫に早くも進んで具體化したのであつ

た。之を聞いた横濱蠶絲貿易同業組合員は大に憤慨し、一同相議して直に復興會を組織し、猛然蹶起して之が對抗戦を開始した。全國の主産地を奔走して、其の間との持續を鞏固にする一方、金融運輸保險等のことに關して、主務官廳の諒解を得て、眞先に生絲輸出貿易の復活に着手したのである。斯くて營業者は、九月中旬頃、本町通の焦土を掻き分けて、一大バラックを建て、各々、茲に假の店舗を構へ、取敢へず三井倉庫澁澤倉庫等に於ける焼残り生絲約一萬五千捆の内四千捆を目標として、十七日には早くも市場を開いた。賣方買方互に折衝して相場を建て、取引を開始したのであつた。更に二十日には關東商業會議所臨時聯合會から横濱生絲輸出港維持の件を當路に建設せらるゝ、あり、尋で横濱絹業復興會も組織され、其の斡旋で十月八日、全國絹業聯合會の臨時總會は、本市に開かれ、絹物及其の加工品は從來の通り横濱を輸出港とすべき旨を聲明させた。此時の輸出業者等の活躍は實に堂々たるものであつた。それより所謂生絲輸出二港問題は、容易に解決されず、盛に論議されるのであつたが、横濱側の對策が當を得たものであつたのと、政府筋各地生産者及び一般の同情を得たとに依つて、難關を切りぬけて、輸出港の首位たる地位を永久に保つて、横濱市の生命を完全に繋ぎ得ることが出来たのである。これに依つて復興も多大なる力を得たのであつた。尙ほ當時税關は

保税倉庫を無償提供し、横濱正金銀行は、生絲絹織物等の貿易取引に要する資金は極力融通することになつたので、營業者は尠からず利便を得た。市内の主なる十八箇の銀行は、早く九月二十五日より一齊に營業を開始して、金融上利便を與へた。

第十三節 復興の著手 (其の二)

秋がだん／＼深くなつて、朝夕肌を冷たさを覺える時になつて來た。罹災者に冷たい思ひをさせまいと、ある限りの努力をした當局の苦心も、甲斐があつて、而かも大體應急救護各種の施設も一通り出來てゐた。それに復興の曙光がだん／＼見えて來たので、各地に避難してゐた市民達も、追々歸つて來た。斧や槌の音が勇ましく全市に響き渡るやうになつて來た。バラック建の商肆住宅は日に月に殖ゑ、トタン葺の神社佛閣なども建てられて、いつか焼野原であつた寂しい姿も消えて、急に活氣が見えて來た。山下町の焼跡にはフランス人が氣どつたテントホテルを眞先に建て、再び歸つて來る外人のためにこの上もない便利を計つた。米國假領事館も逸早く出來て、アメリカの國旗が空に翻へつてゐるのが、寂しい街路ながら生々とした氣持を添へた。いままでの町の辻や空地に卒塔婆が樹てられ、町内の歿死者の名前が記され、香煙が哀しく

流れて、慘禍の跡は四邊に刻まれてゐた。さうした悲しい情景の内に、復興の曙光は判然と見え來たのである。總ての者が活氣づいて來たのは、貿易界の復活が力づけたので、死んだやうな心持ちでゐた心は、急に甦つて來たのであつた。それに金融會社も復活したので、市内も大に活氣づいた。次に學校が復活した時、子供達はどんなに喜んだか知れない。彼等の心は急に生々とした氣持になつて、新しい希望を持つことが出来たのであつた。市は早くから教育方面に眼をつけ、最初は露天や天幕内で授業をやつてゐたのであつたが、聽て二部教授をなすべく、假校舎の建築を終つて、十月十五日各校一齊に授業を始めたのであつた。當時机椅子等は大阪府から供給を受け、尙教科書及學用品は、全國小學兒童の同情に依つて、文部省を経て寄贈された物を使つたのである。交通も漸次復舊し、十月廿一日からは、市内電車も幹線だけは全通した。當時バラック電車と呼ばれた屋根なしの車輛が運轉された。省線電車も、京濱電車も全通し、東海道線も馬入川鐵橋の修理が出来て、徒歩で渉る必要がなくなつた。其等の作業は主として陸軍工兵隊鐵道隊等の手に依つて爲されたのである。十月二十四日、市役所も大部分は櫻木町驛前の假廳舎に移つて、執務上大に便利を得た。市中は劇場活動寫眞館等、市民の娛樂機關が殆んど全滅して居たので、縣市の當局は何か清新なる娛樂會を

催ふし之を公開して市民に慰安を與へんものと企てたのであつたが、漸次其の運びとなつて、十月九日の夜、活動寫眞會を横濱公園内で開演した。續いて二十四日には海軍々隊樂の演奏會を、同じく公園内で催した。この二つの試みは市民に取つて災後始めての享樂であつた。それは荒んだ市民の心をどんなにか和らげ静めたであらう。其の後、縣市の主催でいろ／＼の催が、公園や小學校で試みられたが、總て好成績であつた。天長節祝日には、市廳でも、各學校でも、例年の通り嚴に奉祝式を擧げて、聖壽の萬歳を唱へた。

十一月二日には、縣市聯合主催の遭難者追悼會を横濱公園内で催した。長き邊りよりは侍臣を差遣はされ、御供物を賜つた。聽て靜かな讀經に連れて、追悼會は嚴に行はれた。參列した人々は縣下及市内三萬二千の幽魂に對して、哀悼の涙を漲ぎ、其の冥福を禱つた。其の後街々にあつた卒塔婆はすつかり取纏めて、堀之内町なる眞言宗寶生寺の境内なる松林の中に移し建てられた。近く回向所を建てた由である。尙久保山の目連宗川合寺の境内にも、無縁歿死者五千七百餘人の一大記念碑が建てられた。

十一月十五日には、市役所の手で市内の人口調査が行はれた。其の計數は三十一萬一千四百二人で、災前の人口約四十五萬の三分の二強に當るのである。

十五日には曩に東京府下竝に本縣下に布かれた戒嚴令が撤廢され、警察事務は全く常態に復した。十二月に入つて、其の九日には市會議員竝に吏員等四十七靈の追悼會を假市廳舎の樓上に開いた。十六日には平沼市會議長竝に原復興會長の發企に依り、市民大會を復興會内に開き、非常の盛會裡に横濱港灣擴張に關する決議を爲し、之を當路に建議することゝなつた。之より先き十一月十日、國民精神振作に關する大詔が發されたので、十二月二十三日、市長は市立各學校長、同職員及市内の各青年修養團長等を合せ約一千名を壽小學校に召集して、詔書捧讀式を舉げ、御趣旨の貫徹に努めるやう、殊に災後の本市々民は一層の覺悟努力を要することを懇々と諭達する所があつた。當時歳末の景況は如何であつたかといふに、中心地が漸く表通りだけの體裁をつくつたばかりで、所々に尙空地が尠くなかつた。裏通りの大半は焦土の儘であつた。然るに場末の殘存地域は、災前よりも却つて活氣を呈した所が多く、大雜貨店の臨時賣場などもあちこちに開かれ、日常必需品の賣行は實に飛ぶが如くであつた。早くも活動寫眞などが出來て客を呼んだ。花柳界は大變な好景氣であつた。かうした景況が復興の歩に違ひなかつた。

斯くて震災後四箇月は多端の中に、夢のやうに過ぎて、恐怖の年は行いて、新しい年を迎へたのであつた。人々の心は漸く落ちつきを得て、却つて恐ろしい天災は彼等を眼覺めさせたのであつた。人々はある限りの努力を盡して働き始めたのであるが、新年の儀禮とても多くは省かれ、門松も見えなかつたことは云ふまでもない。縣市當局の努力は決して空しくはなかつた。一時は挽回覺束ないとまで悲觀されてゐた港にも、いつか前と同じやうに、大汽船が横付けされるやうになつた。貿易狀態も亦順調に歸つて段々盛んになつて、活氣が全市に溢れて來た。一月二十六日の皇太子殿下御成婚の盛典の良き日には、市街各所裝飾して奉祝の意を現し、今までにない活氣を添へた。當日は縣廳市廳其の他の官公衙及各學校とも一齊に奉祝式を舉げ、小學兒童の旗行列なども行はれた。各街のバラックにも新らしい國旗が、新興の色鮮かに翻つて、災後日尙淺き横濱市は、茲に始て喜色溢れ、歡聲の湧くを見た。其の後臨時震災救護事務局は、三月末日に廢止され、横濱出張所も撤退されて、殘務は縣市に於て處理することゝなつた。九月一日は、丁度災禍の滿一週年で、市内所々に追悼記念會が催され、市では此日に震災記念館を公開した。十三年から十四年までの間にも、市内の官公衙會社銀行工場等各種の大建物が修築され、或は新築された。生絲検査所などは大規模な設計で十三年春から新築に掛つたが、其の竣工の曉は、新に市内に偉觀を添へる事であらう。

災後一年有半を経た、大正十四年三月には内務大藏兩省から九百三十萬圓の巨費を投じて著手した。岸壁修築の工事も竣工したので、竣工式を舉げて復興事業の先驅を示した。各街も大半トタン葺の半永久的の家屋が、凡そ災前の約七分半まで建てられた。市営住宅も亦各地に増設された。關内や伊勢佐木町邊などは、元の繁榮と賑さを取返し、略々震災前と違はないやうにまでなつたので、人々も安心して、自分の業に楽しんで勵むやうになつたのである。

市役所もやがて、元の港町の焼跡へ、本建築ではないが、感じの良い新装で建てられ、櫻木町の假役所から引き移つた。

一般震災義捐金の一部で東京に設立された財團法人同潤會が、一千戸の長屋を立てて、一年半の契約で建てたので、市民は大に助つた。市役所では四十五萬市民の戸籍と寄留とを全部焼いて困つたので、市民は全く無籍者同然であつた。之れを再製する事は緊急な要務であつたので、これに依つて司法省から告示があつた。それは市役所が戸籍を届けよといふ告示や、宣傳等をやつて、一般市民に洩れなく知らせるのである。市役所でこれに極力盡したので、いふまでもなく多大の効果があつた。燒野原の横濱市が二三年の中に復興に進んだといふことは、全く官民一致の協力に依るものである。

今横濱市は日一日と復興に向つてゐる。やがて道路も改築されて、市街地の家屋も耐震耐火のものが多く建てられる時がくるであらふ。その時には、震災前の横濱市より一層繁榮な大横濱市が生れるのである。たゞ山下町並に山手町の外人街町は、復興が思ふやうにならず、一部は久しい間廢墟の儘にされてゐることは誠に遺憾の次第であるが、是れは外人が、横濱が元のやうに復興するかどうかを案じて、容易に歸つて來ない爲めと、建築の容易でない爲である。その上に區劃整理企畫も存外に手間取れたからでもある。而し既に計畫も進められて、外人を招ぐ策として、ホテルの建築、外人住宅の建設等が實現されるやうになれば、早晩は復興の時が來るであらう。斯くて市内各域の區劃整理も行はれ、有らゆる營造物の復舊も竣り、各街家屋の本建築も遂げられ、大廈高樓轟々として甍を競ひ、宏壯華麗なるが上に、更に堅牢にして利便を加へた理想的文化都市の建設せられて、街衢の面目を一新し、當年悽慘の跡は唯震災記念館にのみ貽ることとなるのは、必ずや期して待つべきものがあるのである。

災後百三十餘日経つた十三年一月十五日午前五時五十分二十四秒強震があつた事をついでに記しておく。十二年大震とは比較にならないが、市民は戸外に避難したことで、多少の倒潰家屋あつたこと、十數名の死傷を出したことで、其程度が知れる。其の震

原地は本縣の丹澤山であつたと謂はれてゐる。越えて十四年五月二十三日の午前、兵庫縣及京都府の一部に激震があつた。其の被害地域は廣くはなかつたが、二三の町村は家屋の倒潰と火災とに因つて甚大の慘害を呈した。我横濱の市民達は何れも先年の體驗に顧み、同憂の念に堪へず、創痍は未だ新たなれど、黙視するに忍びないといふこととて、夫々相當の金品を出し合つて送つたのである。市はこれが幹旋の任に當つて、慰問使を派遣した。復興途上にある間に於ても、實に慙うした事はあつたのである。

第十四節 罹災世帯數竝に罹災人口等の統計

震災に因る罹災世帯數、竝に罹災人口の調査は、當時府縣や市町村警察署等で、夫々調査されたのであるが、臨時震災救護事務局では、國勢調査の例に倣つて、一定標準の下に、震災被害調査を爲すこととなつて、災後七十五日を経た十一月十五日夜半を期し、震災ばかりでなく、全國各府縣に亘つて一齊に、所帶數の調査を遂げ、完全な統計報告を發表したのである。この完全な報告に依つて、震災當時の被害を明にするため、その該統計報告の中から、我横濱市の分だけを抜いて左に記すことにした。

一 罹災世帯數

罹災とは全燒半燒全潰半潰及大破をいふ。
全潰半潰大破の後、更に火災に罹りたるものは、單に全燒半燒に計算せられ、全潰半潰大破の數には計算せられず。

イ 罹災世帯の實數及他との比較

罹災一府六縣下	(實數)	六九四、六二一	(比例)	一〇〇・〇	(現在世帯一〇〇に付被害世帯)	三〇・〇
右の内神奈川縣下		二三七、三三八		三四・二(一〇〇、〇の内)		八六・五
右の内横濱市		九四、八八三		一三・七(一〇〇、〇の内)		九五・九

ロ 横濱市に於ける罹災の種別 (以下横濱市)

震災當時の世帯數	(全)	燒)	(半)	燒)	(全)	潰)	(半)	潰)	(以上計)	(大)	破)	(合)	計)
六、七〇〇	三、三六八	一	九、二〇〇	一〇、七三三	八、一四〇	二、七五三	二、七五三	六、四八三					

震災當時の世帯數は大正九年の國勢調査に依りて得たる數に、更に増加率に依りて得たる數を加へたるものなり。

ハ 罹災世帯數一〇〇に對する罹災種別の比例

(全)	燒)	(半)	燒)	(全)	潰)	(半)	潰)	(以上計)	(大)	破)
六六〇	一	一〇・三	一・三	一・三	八七・六	一一・四				

罹災世帯數竝に罹災人口等の統計 五五

二 震災當日現在世帯數一〇〇に對する罹災種別の比例

(全 燒)	六・七	(半 燒)	九・三	(全 潰)	九・三	(半 潰)	一〇・七	(以上計)	八・七	(大 破)	二・六	(合 計)	九三・〇
-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	------

二 罹 災 人 口

イ 罹災人口種別及全體との比較

甲 死 傷 者 の 數

罹災一府六縣下	(死 者)	(行衛不明者)	(計)	(重 傷)	(輕 傷)	(計)
右の内神奈川縣下	九一,四四	二二,七五	一一八,一九	六,五四	三三,〇〇	三九,五四
右の内横濱市	二九,六二	二,四四	三二,〇六	六,一七	三,三三	九,五〇
	三,三六	一,九五	三,三五	三,一四	七,〇九	一〇,四四

乙 死 傷 者 其 の 他 罹 災 者 の 數

罹災一府六縣下	(震災當日の 現存人口)	(死者並に行衛不明者)	(重 輕 傷 者)	(全燒半燒全潰 半潰流失罹災者)	(大 破 損 罹 災 者)	(計)
右の内神奈川縣下	二,七六,〇〇〇	一〇四,六九	五,〇四	二,四八,〇九	七,〇〇	三,四四,八八
右の内横濱市	一,三九,〇〇〇	三,一八	一,五五	六,一四	三,一三	一,七三,〇〇
	四三,〇〇〇	三,三五	一〇,三六	三六,六五	五〇,〇九	四三,四四

震災當日の現在人口は大正九年の國勢調査に依りて得たる數に増加率に依りて得たる數を加へたるもの

なり。

輕傷は一週間以上休養治療したるものにして、重傷に非ざるものなり。

ロ 横濱市に於ける震災當日現在人一〇〇に對する罹災種別比例 (以下皆横濱市)

(死 者)	(行衛不明)	(重 傷)	(輕 傷)	(全燒半燒 全潰半潰)	(大 破)	(計)
四・八三	〇・四九	〇・七一	一・六〇	七四・二四	一一・三二	九三・一四

ハ 罹災者一〇〇に對する罹災種別比例

(死 者)	(行衛不明)	(重 傷)	(輕 傷)	(全燒半燒全潰半潰)	(大 破)
五・一九	〇・四七	〇・七六	一・七二	七九・七一	一一・一五

ニ 死 傷 者 の 體 性 別

(死者行衛不明者總數)	(死 者)	(行衛不明者)	(重 傷)	(輕 傷)	(重 輕 傷)
(男)	一一,四一七	一一,九一八	一〇,三四三	一一,〇四一	五,八三八
(女)	一一,四一七	一一,九一八	一〇,三四三	一一,〇四一	四,三七〇

ホ 死 者 並 行 衛 不 明 の 年 齡

(死 者)	(行衛不明者)	(行衛不明者)	(行衛不明)
(當歳より 十四歳まで)	六,八一七	(十五歳より 五十九歳まで)	二二,九〇二
(六十歳以上)	一,六六六	(當歳より 十四歳まで)	三九九
(六十歳以上)	一,六六六	(十五歳より 五十九歳まで)	一,三五三

罹災世帯數並に罹災人口等の統計

三 罹災者の職業

イ 罹災者の本業者従属者別

本業者とは収入を得て一家を經營するものをいふ。
従属者とは本業を有せざる家族及家事使用をいふ。

(總數)	(罹災者總數)	(本業者)	(従属者)
(男)	(女)	(男)	(女)
四三,七四七	三三,四四二	一七,八七〇	一六,六四〇
一七,八七〇	一六,六四〇	三,五三三	二四,四四〇
一七,八七〇	一六,六四〇	三,五三三	二四,四四〇
(男)	(女)	(男)	(女)
一七,八七〇	一六,六四〇	三,五三三	二四,四四〇
一七,八七〇	一六,六四〇	三,五三三	二四,四四〇

〇 死傷者の本業者従属者別

(死傷者)	(本業者)	(従属者)
(計)	(行衛不明者)	(重傷)
(男)	(女)	(男)
(計)	(行衛不明者)	(重傷)
二,二九四	八八九	一,〇〇五
一,〇〇五	一,〇〇五	一,〇〇五
一,〇〇五	一,〇〇五	一,〇〇五
(男)	(女)	(男)
一,〇〇五	一,〇〇五	一,〇〇五
一,〇〇五	一,〇〇五	一,〇〇五

ハ 罹災本業者の職業概別 (本人を基として調査したもの)

(職業概別)	(總數)	(死傷者)	(行衛不明)	(重傷)	(輕傷)	(死傷行衛不明)
(本業者)	(従属)	(計)	(本業者)	(従属)	(計)	(計)
農業	工業	商業	水産	礦業	工業	商業
一,八四九	九七九	一,八四九	一,八四九	九七九	一,八四九	九七九
一,八四九	九七九	一,八四九	一,八四九	九七九	一,八四九	九七九
一,八四九	九七九	一,八四九	一,八四九	九七九	一,八四九	九七九

(職業概別)	(總數)	(死傷者)	(行衛不明)	(重傷)	(輕傷)	(死傷行衛不明)
(本業者)	(従属)	(計)	(本業者)	(従属)	(計)	(計)
交通	公務	其他	家事	無職	計	
一,七四六	一,七四六	一,七四六	一,七四六	一,七四六	一,七四六	一,七四六
一,七四六	一,七四六	一,七四六	一,七四六	一,七四六	一,七四六	一,七四六
一,七四六	一,七四六	一,七四六	一,七四六	一,七四六	一,七四六	一,七四六

ニ 罹災本業者の職業概別 (世帯を基として観察したるもの)

(職業概別)	(罹災者總數)	(全焼)	(全潰)	(半潰)	(大破)	(以上計)	(無破損)
農業	工業	商業	水産	礦業	工業	商業	交通
一,三〇〇	一,三〇〇	一,三〇〇	一,三〇〇	一,三〇〇	一,三〇〇	一,三〇〇	一,三〇〇
一,三〇〇	一,三〇〇	一,三〇〇	一,三〇〇	一,三〇〇	一,三〇〇	一,三〇〇	一,三〇〇
一,三〇〇	一,三〇〇	一,三〇〇	一,三〇〇	一,三〇〇	一,三〇〇	一,三〇〇	一,三〇〇

罹災世帯數並に罹災人口等の統計

木 罹災者本業者の職業中分類

右罹災者本業者を職業中分類に依りて示せば左の如くである。

農耕畜産蠶業三〇六四 林業六六 漁業一、二四八 採掘冶金業二一〇 土石採取業九一 窯業五六三
 金屬工業五六七 機械器具製造業四、六一八 化學工業一〇、四四 纖維工業五、一一三 紙工業七四五 皮
 革骨角甲羽毛品類製造一七八 木竹類に關する製造業四、六六九 飲食料品嗜好品製造業三、三三二 被服身
 の廻り品製造業六、三六三 土木建築業一〇、〇三一 製版印刷製本業一、九二二 學藝娛樂裝飾品製造業一、〇
 三〇 瓦斯電氣及天然力利用に關する業二、三六六 其の他の工業三〇、九六 物品販賣業三、七七八 媒介
 周旋業一、一四七 金融保險業二、四八九 物品貸貸預り業六五二 旅宿飲食浴場業九、九七四 其他の商業二、
 六七五 通信業一、五二六 運輸業一、五〇二八 陸海軍人一四一 官吏公吏雇傭四、六〇四 宗教に關する業
 七一九 教育に關する業一、七三六 醫務に關する業二、八四九 法務に關する業二、二五 記者著述業二、九二
 藝術に關する業一、四二八 其他の自由業一、七五四 其の他の有業者一、七四八 家事使用人二、一七 收入
 に依る者七一 無職業九、〇四八 本業なき從屬者二、四四、四四〇 計四一、二、四七

へ 人口の異動

大正十二年九月一日推計人口四四、二六〇〇 死者及行衛不明者二、三三三五 十一月十五日現存人口三一
 一、四〇二 九月一日人口と十一月十五日人口との差減一、三三、二九八

ト 各地へ避難したる者の數

災後本市の罹災者で、本縣郡部本市以外の市及他府縣へ避難した者の數どれ程であ

つたか。九月上旬頃には必ず二十萬人もあつたであらう。しかし其の正確な數は到底計上出来ない。災後七十五日を過ぎた十一月十五日午前零時現在に於て、本市の罹災者で本縣郡部本市以外の市及各府縣に避難してゐた者の、明らかな總數は十一萬四千三百人であつた。此内東京府下に避難した者が最も多く、其の數二萬四千餘人に亞いで神奈川県及横須賀、川崎市に二萬一千餘人、兵庫縣下に一萬一千餘人、此等が最も多い所である。左に各地方への避難數を記す。

(散在地方別)		(總數)	
東京府	二四、二七二	(男)	一二、五一五
内東京市	七、六三四		四、三一六
郡部及八王子市	一六、六三八		八、一九九
神奈川県	二一、四〇六		一〇、二九八
横須賀、川崎市	四、八九一		二、一〇五
千葉縣	二、三〇八		一、〇五〇
埼玉縣	七、六一四		三、四〇九
山梨縣	二、七二〇		一、三〇一
茨城縣	二、一七三		九三七
京都府	一、五一三		七五二
大阪府	五、四五六		二、〇六九
兵庫縣	一、七一		六、三三一
		(女)	一、七五七
			三、三一八
			八、四三九
			一、一〇八
			二、七八六
			一、二五八
			四、二〇五
			一、四〇九
			一、二三六
			七六一
			二、三八七
			五、四八〇

罹災世帯數並に罹災人口等の統計

(總)
 北 沖 鹿 宮 熊 佐 大 福 高 愛 香 德 和 山
 海 尾 兒 崎 本 賀 分 岡 知 媛 川 島 歌 口
 道 縣 縣 縣 縣 縣 縣 縣 縣 縣 縣 縣 縣 縣
 數) ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~

一一四、三〇一
 一〇九〇
 三三〇
 一九一
 三一
 一六九
 一三一
 一五七
 四八三
 一三九
 二七七
 一一七
 一一三
 二二五
 三五七

五六、二五八
 五五七
 二七一
 一〇三
 一六
 七八
 六六
 六九
 二六三
 七〇
 一三七
 五八
 六三
 一一三
 一六九

五八、〇四三
 五三三
 五九
 八八
 一五
 九一
 六五
 八八
 二〇
 六九
 一四〇
 五九
 五〇
 一一三
 一八八

廣 岡 島 島 富 石 福 秋 山 青 岩 福 宮 長 岐 滋 愛 三 奈 栃 群 新 長
 島 山 根 取 山 州 井 田 形 森 手 島 崎 野 卓 賀 知 重 良 木 馬 湯 崎
 縣
 ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~

四一八
 三五七
 一一八
 一二五
 九五四
 一、二九八
 八五六
 二四四
 六六四
 三四九
 二五四
 一、六九二
 一、四四三
 一、六七三
 一、二〇二
 五二一
 五、二〇八
 一、七四〇
 二四二
 二、一〇六
 二、一〇四
 二、四二四
 四八八

一八九
 一六三
 五五
 六二
 四三〇
 六二〇
 四一三
 一一八
 三〇二
 一六九
 一二五
 七五一
 六一四
 九五五
 六二九
 二六二
 二、六二五
 九六〇
 一一七
 九四四
 九八三
 一、〇九〇
 一九九

二二九
 一九四
 六三
 六三
 五二四
 六七八
 四四三
 一二六
 三六二
 一八〇
 一二九
 九四一
 八二九
 七一八
 五七三
 二五九
 二、五八三
 七八〇
 一二五
 一、一六三
 一、一二二
 一、三三四
 二六九

第二章 震災と横濱市

六四

前横濱市長 渡邊勝三 郎述

予が桑港の商業會議所に對して電報した所の『震災は殆ど全市の九十パーセントを破壊焼失せしめ、死者三萬、負傷七萬、生存者は寒氣に直面して傳染病と飢餓とに襲はれ、非常なる危険に瀕しつつあり』の數行に依つて見ても、如何に當時の慘憺たる状態で在つたかを思惟せしめる。而かもこれが瀕々として來る餘震と、炎々數里、數晝夜に亘つて尙ほ消えやらぬ火焰の巷に、累々たる死屍を目前にして書かれたものであると思ふと、吾々は戰慄、呪咀、恐怖などといふあらゆる感情さへも抜き去られた呆然さに依つて、只夢幻の如く當時を回想する外はないのである。

大正十二年九月一日、激震一度、關東一帯の地を襲ふや、數十年の建設に、極東文化の咽喉を扼し、帝都の關門を誇る壯麗な我横濱市は、瞬間にして破壊し、次いで市内約百箇所に起つた火災は、折柄の狂風に捲かれて、全市一夜にして焦土と化したのであつた。數萬の屍は街衢の狭きまでに横たはり、市民は廣茫たる灰燼の街を、食を求めて走り、流言蜚語頻りに至つて、人心險惡、總ての方途も施すに術なき程の混亂であつた。幸にして

戒嚴令は布かれ、秩序の稍、回復すると共に、全國からの救援は到り、次いで地球の全面、人類からの同情は、澎湃として潮の如く及んで、此處に破壊から建設への第一歩は始められた。焦土の上に溢れた『より大なる横濱市へ』の聲を聞くまでの横濱市役所は、矢張り慘憺目も當てられないのであつたのだ。當時主務大臣に對して發した電報で見ても『震災のため現金皆無、日々の支拂ひに差支へ居るにつき、現金一萬圓借用したし。成る可く五圓一圓と補助貨幣にて願ひ度し』とあるが、如き混亂さにあつたのだ。それが今は約一億を超ゆる復興計畫に著手されてゐる。彼此思ひ合はすれば感慨は更に深い。

平塚から横濱へ

彼の地震の當時、予は平塚に避暑してゐた。其處では矢張り家を破壊されて、その夜は野外に露營し、二日を迎へたのであつた。回想すれば、東京は全滅に近い損害を被むつたと聞いたが、横濱はそれ程でもあるまいと感じてゐた。兎に角心配になるので、子供^{大學へ行}を連れて二日の夜から徒歩で横濱に向つて、先づ井土ヶ谷に入つた。『横濱の様子は、何うであるか』を確かめたいので、商業學校へ行つて見たが、その時はもう三

震災と横濱市 (平塚から横濱へ)

六五

日の朝で、學校には避難者の群が充滿して混亂を極め、學校當局の所在も判らない。市役所へ行つて見ようと市内へ入ると、慘憺たる被害の状態に一驚を喫した。餘燄は尙方々に立昇つてゐる。橋は焼け落ちてゐる。馬の焼死體がある。犠牲となつた人々が道路に算を亂して横たはつてゐる。その間を辿り、焼けた橋の鐵骨を傳ひ、漸くにして市役所の附近まで來た所が『市役所は焼けた』と云ふ。公園に出張所があるといふので行つて見ると『今日から櫻木町の職業紹介所へ移轉した』といふ處である。其處ではいろ／＼の掲示があり、傷病者の世話などをしてゐた。

更に櫻木町に向つて職業紹介所へ入つたのは午前十時頃であつたらうと思ふ。早速善後處置に就いて相談する爲に、主だつた人々を呼んで協議した。青木芝辻の兩助役、田村山田建山田内各課長、朝倉電氣局長、森田通譯、水谷横濱港調査會幹事、能見大野兩水道技師など十人餘の人々であつたと思ふ。地震の時から應急的な諸處置を聽くと共に、今後の急救策について協議し、漸くにして市役所らしい市役所が出来上つた。然しまだ秩序といつて何等の回復を見ず、人心は却つて悪化せんとしてゐる程で、市役所の事情も只罹災民の急救に就いて全力を擧げて、如何なる微細な生活資料に對しても供給の方法を講じてゐたので、事務は混亂と複雑を免れなかつた。一時市民の勝手

であり臺所であつた市役所が、一家庭に於ける臺所或は勝手のやうにごたくしてゐたのは已むを得ないことであらう。

それにしても予は此の瀕死の横濱を見て『もう駄目だ』とは思はなかつた。然し只驚愕惜く所を知らなかつた。彼の壯麗な横濱市を見て郊外に出て、再び歸つて來た時に、その市街は『無くなつてゐた』のだ。『無くなるところ』を見てゐなかつただけに、感慨は更により深いものがあり、只『驚いた』と稱するより外に適當なる言葉も見出し得なかつた。

印象深き諸施設

二日から横濱船渠會社の倉庫に在る米を初めとして、市内各方面に行はれた掠奪に就いては、鮮人襲來の流言蜚語と共に、人心を悪化する重大な二問題であつた。鮮人襲來の如き荒唐無稽なる流言蜚語が行はれたのは、予が平塚を出發した當時からであつた。予はそれを聞いた時、濃厚單純なる地方民が徒らに宣傳から宣傳を生んだ虚構の説であるを感じ、智的洗練を経た都市人の一笑に默殺し去つたものであらうと思つてゐた。勿論横濱市が此の不祥なる蜚語の源泉であらうとは感せず、又之が爲めに全市

が地震以上の無秩序と混亂に置かれてゐやうとは夢想だにもし得なかつた。

掠奪と此の蜚語とは益々秩序を攪亂し、人心を悪化せしめ、その底止する所を豫想し得ないので、予は縣廳に時の安河内知事を訪づれ、「此の二問題は早く如何にかして解決しなければ、更に重大な危機を招來せぬとも限らない。その流言蜚語の如き、自からの影に恐れて脱がれ得ざる滑稽さに似てはゐるが、その滑稽事も放置すれば益々人心は悪化し、秩序は滅裂し、底止するなきに至るであらう。此際急遽戒嚴令を布いて貰ふ方法を講せねばなるまい」と提言した。然るに安河内君は「戒嚴令を布いても警察権が破壊された今、執行能力が無いから駄目であらう」と否定されたが、予は戒嚴令の布かれただけでも人心を安定に導く一つの方法であると感じたので、極力之れを主張した。知事は何處までも反對したが、情報の判明と共に、之れと前後して政府が戒嚴令を布き、横濱もそのうちに含まれてゐる事が判明した爲め、問題は自然に消滅した。

又掠奪の問題に就いても、知事は「防禦力が無い」といふので、予も方策なく、遂に軍隊の來援するまで放置することになつたのだ。しかし予は此の非常に際して、掠奪の如きもその物資は「近隣相寄つて共に生活の資と爲すであらう」と思つてゐたので、此行爲の放任は、此の考へに依つて僅かに慰めてゐたが、今から考へて見ると、餘り人間

性を美しいものと見過ぎてゐた場合も無いではなかつた。

船に在る物、市の内外に在る物を通じて、市民が時に喰ふもの位は足りるであらうとは想像してゐたが、殆んど全市の物資が灰燼に歸したといつて良い横濱に、全市民を留まらしめて置くことは危険極まりなきことである。困る人間は總てこれを市外に流出せしめて、一時を安定せしめなければならぬ。即ち東京、横濱、清水港を連絡する爲めに軍艦を出すことを海軍に交渉し、市民を流出せしめて、市内の消費を減ずる籠城の政策を採つたのであつた。斯くて一時四十五萬市民が十八萬に減少したのは、此の政策から出た影響であらうと感じたが、此處に困つたことが出來た。それは後の話であるが、此處にも一言して置きたい。此の現象は勿論此の政策の爲めと稱することは出來ない切離された問題なのであるが、觀察の一面からすれば此の政策の爲めとも言ひ得るもので、「横濱はもう復興しない、永久に此の儘の廢市とならう」といふ考へが有力者達を捉へたことである。此の考へが財界の巨頭の間に傳はり、横濱を去らうと云ふ者が續出した。市民が流出することは市を救ふ爲めに適當な方法であるが、横濱復興の先驅となるべき有力者が横濱を去ることは、是れ實に横濱を亡ぼすことである。要するに將帥なくして籠城は無いのであるからだ。其處で予は「横濱は必ず復興す

る、又復興せずにもゐないし、させずにも置かない」と決心を語ると共に、斯うした思想が市民生活の將來を脅かし、現在の歸趨に迷ひ、人心は悪化するのであるから、予の意のある所を市民にも傳へるべく、『横濱は必ず復興する』といふ彼の告諭を發表したのであつた。

混亂の日は何時までも續くかと思はれた。その中に在つて全國各府縣殊に大阪を中心とした有力なる府縣には頻々として應援依頼の電報を發し、日用物資の供給を依頼した。海軍が來ると共に各地の情報も傳へられ、戒嚴令の布かれたことも判かり、奥平少將が陸兵を率ゐて警備の任に當つた。しかしそれでもまだ軍隊は不足してゐる程だつたので、予は更に増兵を要求すべく知事と少將に相談したが、少將は「自から警備隊司令官であり乍ら、増兵を要求することは、自からの任務を盡し得ないやうなもので困る」と云ひ、知事も増兵に反對であつたので、その時はその儘になつて仕舞つた。而してそれは總ての問題が此の三名の協議に依つて行はれ、宛然たる奥平知事市長の三頭政治の觀を呈するに至つた。

あれは確かに四日であつたと思ふ、前橋からの急援自動車が二子を渡つて横濱に入つた、是れが急援の劈頭であつたと思ふ。神奈川の築地橋が破壊されてゐる爲め、工兵

隊に依頼して應急の假橋が出來て、自動車を通れるやうになり、徒歩に依らずに東京との往復がついた譯で、政府との交渉が漸く意の儘に出來ることになつたのである。

予は直ちに港内の船舶からガソリンの供給を受けて、平沼市會議長と二人で上京した。首相内相陸相參謀總長福田戒嚴司令官、又予が倫敦に行つた頃、英國で知合になつた小林少將などにも會つて、増兵の事を陳情した。即ち

横濱の現状は混亂その極に達してゐる有様で、秩序回復の爲めには到底奥平少將の率ゐる兵員では不足してゐる。横濱市は東京と離れてゐるために、皆東京に捉はれて横濱を顧みないのでないか。横濱は内に四十萬の市民を擁して、その生活を脅かされてゐるばかりでなく、開港場であつて諸外人も多く駐在してゐる。此の儘に放置して置いては國際的大問題を惹起せぬとも限らない

と力を極めて説き、遂にその夜のうちに騎兵その他が派遣されることになつたのだ。此の機會に感謝の意を表したいのは、平沼市會議長に對してであつて、君が震災のため彼の悲惨な家底的な不幸打撃に遭はれ乍ら、尙ほ市の爲めに努力せられたことである。

告諭と新聞紙の發行

『横濱は駄目だ』といふ聲は東京から起つたらしい。鐵道省の者が地震と同時に横濱を視察して、『横濱港は全滅した。鐵道も破壊されて回復の見込はない』と復命したといふ話で、鐵道の開通が遅れたのも、横濱廢滅の議論が横濱市自身の巨頭連に盛んになつたのも、此の邊からの原因が多からう。一人の輕卒な言葉が重大な結果を齎したり、一人の偶然の噂が瀾漫して、流言蜚語となることは、既に鮮人騒ぎで痛ましい經驗をしてゐる。是れもその類の一つであらう。しかし自分は『港が駄目になつた』とは思はなかつた。横濱港は燒残つた残骸のみでも、二三流の港に比較したならば立派過ぎる程の施設なのだ。その残骸の物資のみでも非常なものだ。港が大丈夫である限り横濱は復興する。盛んに市外へ流出してゐる市民も、市内の秩序回復と共に必ず戻つて来るものである。市外に脱がれて、他地方の土著民と競争し得るものでもなく、又住馴れた横濱の土を忘れ得るものでないからである。しかし此の『横濱は駄目だ』といふ一種の不安は何うにかして除かなければならない。予は横濱市會の意思を以て『横濱は必ず復興する』と表示して貰ひたかつたので、確か第一回の市會の時であつたらう、此れを踏つて見た。然るに市會にはそのやうな権限はなく、又そのやうなことを議決するのは違法であるとの議論があつて、遂に議決に至らなかつた。予の視る

所では彼の非常時に際して法理論も何もないと思つたが、然かし市會で議決しないのであるから已むを得ない。仍つて前にも話した通り、市長の告諭として横濱復興の意思を表示したのであつた。

純然たる無警察の状態、痛ましいばかりの流言蜚語、想像は更に想像を生む、無秩序は更に無秩序を生む、噂は更に噂に輪を掛けて走る、悪化せる人心は更に悪化に導かれて行く。當時若し眞實を傳へる一つの新聞紙があつたならば、そしてその新聞紙が市民に眞實を語つたならば、流言も尠なく、人心の悪化もあれ程ではなかつたであらう。人心の安定を得るためには、流言蜚語の荒唐無稽であることを知らせねばならない。市民生活の安定の爲めには、市の行政を知らしめねばならない。食糧木材衣類の供給並に配給軍隊の配置、警察力の回復、通信交通の状態等、當面の問題と共に、更により高い精神的な諸問題、或は復興の御詔勅、皇族を始め大臣方の視察、或は横濱市の復興計畫を傳へ、或は政府の方針を傳へる爲めに、即ちより高い市民としての健全なる思想を持たせる爲に、何等かの報道の機關を得ねばならない。種々攻究の結果、『横濱市日報』を發行する事になつた。品川邊りの小さな印刷屋で、不備な活字を以て發行されたものであつたが、之れが爲めに、此の不備な印刷屋の爲めに、市役所と市民との聯絡が出來、

諸新聞の復興するまで、非常に有力な機關を爲したのであつた。

復興の一步へ

横濱は何と云つても港を中心とせねばならない。それが先づ政府へ『横濱港は全滅した』と傳へられたことは大打撃である。

東京市が震災と同時に、東京市の船舶の聯絡に横濱港を見限つて、芝浦に應急の假施設を行つたことは明瞭なことであつた。予は横濱港だけは大丈夫であると思つてゐたが、しかし海底が如何に變化してゐるかに就いては、杞憂なからざるを得なかつたのである。で、警備の爲めに入港した軍艦山城の高橋大佐に依頼して港の調査をして貰つた。その結果、港は完全であつて、地盤の低下に因つて却つて水深を増した程であるといふので、横濱復興の確信は更に確信づけられるに至つた。

丁度十日前後の頃であらう、東京を始め全國に遷都論さへが戦はされ、人心は益々不安に導かれた爲め、『帝都復興の詔勅』が仰せ出されるに至り、帝都復興計畫は樹立されやうとしてゐたのである。『帝都復興の中に横濱も含まれてゐると思ふが、若し含まれてゐないならば含めて貰はねば困る』といふ横濱市の要求と、『横濱港が完全であ

る』とは聞いても尙ほ不安がり乍ら、それでも芝浦よりは増しであらうから……』と、内務省が原田内務技監安藝博士などに港の調査をさせたのは殆んど同時であつた。原田技監の調査の結果、横濱港の完全であることが裏書せらるゝに至り、内務省も横濱復興に力を注ぐやうになつた。即ち横濱に對しては『港第一』の根本方針を持つて進んだことが明白である。随つて山本首相は『帝都復興計畫の中には横濱も含まれてゐる』と聲明した。然し横濱市としては尙ほ不安であつたのである。

震災前既に隠退を聲明した原富太郎君が、此の震災といふ全市に繋る大災厄に遭ふや、予の請を容れて、敢然横濱市復興會を組織された。そしてその會の一番最初の運動は『帝都復興の裡に横濱市も含まねばならない』といふのであつた。又横濱市會は何れも簞笠、尻端折りの姿で、假市役所の屋上に露天で開いて、矢張り『帝都復興には横濱も含まねばならぬ』と決議した。

機運は斯くの如くにして動いたのである。首相の聲明にも更に不安を感じた吾々は、復興會長商業會議所會頭市會議員市長など上京して陳情した。之れは井上大藏、犬養遯、山内鐵道の三大臣が視察に來られた二日ばかり前であると思ふ。予等の陳情は強硬を極めたもので、

『御詔勅に依る帝都復興といふ中には勿論横濱市をもインクルーズしてゐるものと察せられる。然かし政府はこれに就いて如何に考へられるか。横濱は東京市の關門であり横濱をも包含する上に於て初めて帝都を爲すものであらうと思はれる。横濱市民は政府が横濱を見るに軽く横濱は復興せぬのではないかとの不安に脅えてゐる。既に政府も横濱市をインクルーズした帝都復興であると聲明するからには、不安を除く爲に、或は御詔勅に依るか、それが出来ねば總理大臣の宣言に依るか、何れにしても文書を以て内外に聲明して貰ひたい』といふのであつた。後藤大養田などの諸大臣は此の陳情を以て尤ものこととして、その旨を諒せられたが、肝腎の總理は『考慮して置かう』に止まつた。而かも此れが効を奏して横濱市の復興計畫は正にその第一歩を踏出すに至つたのである。

其の他のこと

一度震災の報が各方面に傳はると共に物資に、金品に各方面の救援は殆んど至らざるなしと稱しても過言ではなかつた。しかし單にそれのみでは尙ほ完全とは謂はれないので、市自からも救済の方法を講せぬ譯には行かなかつた。然し此の救済に全部

市費を投ずることは勿論出来ないし、又市自身が震前に銀行に預けた金が多少はあつたが、その回收など夢想すべくもなかつたのである。で、予は『救済に對して市費を投ずることは市の財政が許さない』と交渉の結果、後藤内相は『全部國から出す』といふ聲明を與へられたので、非常に順序立つた救済を行ふことが出来た。しかしそのうちに總ての手續は縣を経なければならぬことになつたので、敏速を必要とする場合、非常に困難を感じた。此の時大に役に立つたのは正金銀行の百萬圓の寄附金で、之れを一時立替拂とするの方法を執つたのであつた。

此の機會に於て横濱市が更に感謝の意を表明せねばならないのは、各方面の救援が、殆んどそれのみに依つて完全に全市の應急救護を爲し、盡し得た程に甚大なものであつたことである。バラックの建設、土木用具の供給、米穀衣類の寄贈、金品の義捐等至らざるなく、更に精神的には復興に對して鼓舞聲援至らざるなき状態であつた。地球全面人類の足跡ある所、各團體から、各個人から寄せられた此の同情は、横濱市民の混亂せる生活を秩序立て、その歸趨の復興に在るを知らしめた。言ひ換へれば、復興の基礎を爲したものである。之れに對して、横濱市民は堪へ得ざる程の感激の心を持つて永久に感謝の意を表明するものである。

尙ほ此の機會に一言を要するのは、復興事業に就いてある。震災と殆んど同時に、阪田都市計畫局長の逝かれたことは、横濱市に取つて大きな打撃であつた。予の如きも『横濱市が帝都復興事業の中に含まれる』と決定すると共に、横濱市を如何に都市計畫すべきかに困難したのである。殆んどその見當さへも著かないので、内務省と交渉の結果、牧博士の來援となり、博士はその蓄蓄を傾けて、理想の横濱市街建設に著手した。その建設案が市長案として作製を終つたのは、十月半ばであつたやうに思ふ。その案の完成に要する豫算は約五億圓とされた。後藤内相は『此の機會に理想を實現せしめねばならない。先づ財政の如何を顧るよりも、理想の計畫を樹立するに在る』と言はれてゐた程で、予も横濱市五億といふ計畫の如き、吾國財政の見地からした無理ではないかと感じはしたが、若し財政が許すならば、此の機會に此の理想を實現せしめるのは、爲政者として爲すべき所であるとも思つてゐた。その後各機關の審議を経、政變も亦幾度か到り、更に横濱市の内にしては、幾多人事の變遷もあり、漸くにして復興事業の確立を見るに至つた。その豫算は總額なほ一億を超ゆるであらう。

斯くて横濱市は、極めて多幸なる前途を豫想せられつゝ、復興途上の努力に日も尙ほ足らざる有様である。

今後の横濱市とその市民是

悲痛な試練は物質的に、同時に精神的に、人類生活の行進途上に於ける一つの劃線であり、一つの轉機である。或は又一つの行進曲であるとも觀じ得られるのである。震後頻りに宣傳せられたところの『轉禍爲福』なる言葉は、彼の悲痛を極めたる試練に因る充實感から迷しり出た叫びに外ならない。既に人々の心に潜在する此の覺悟は、期せずしてより向上された生活様式の具現に高調された精神を以て、より向上された生活をその内に盛らうとしてゐる。斯く眞摯と感激とに充實した生活態度は、人類史上に於てすら稀に見る所のもので、或る國家を建設しやうとする民族の慘苦の歴史に現はれて來る『偉大なる記録』に髣髴たるものがあると思考される。

我が横濱市民は斯うした慘苦にして、而かも眞摯である所の生活態度に依つて、復興の第一歩を踏み出したのである。

開港以來數十年の星霜と、何百萬かの人々に依つて建設せられた横濱には、横濱としての都市と、その都市に相應はしくも盛られた魂とを持つてゐた。一朝の災變は此の整善なる市街を崩壊し、焼き盡して、廢墟の巷と化した。然しながら開港以來築かれた

魂までも失ふことは無かつた。その偉大なる精神力は、約一億の巨費を以て建設される新しい横濱の市街に盛らるゝ魂となつて、傳統の美しさと新精神の眞實さとを誇るに至るであらう。

予は我が横濱市の過去の傳統と、歴史に於て總ての中心が『港』に置かれた如く、今後も横濱を中心としたる施政經營が行はれなければならぬと痛感する。今更言葉を改めるまでもなく、横濱は首都の玄關である。東京市は横濱市を含むことに依つて、帝都を稱し得られる譯であつて、横濱港を除外したならば、それは帝都として完全なる都市形成を爲すものでない。既に震災復興の御詔勅は『帝都の中に横濱市も含まれてゐる』と拜察すべきである。横濱市が如何に重要な帝都の一部局を成すものであるかは、之れを以て知られ、横濱港の經營が如何に重大なる事業でなければならぬかは、之れを以て察し得るのだ。

然るに最近に於ける東京市の『東京築港論者』は益々その主張する東京築港を高調して止まない。思ふに震後多數船舶の輻輳と京濱聯絡の杜絶に際して、横濱港全滅の流言が行はれた爲に、政府は一時の應急施設を芝浦に施し、無理押しにも船舶を出入せしめたので、論者は『此の經驗は充分に東京築港の可能を證明したものだ』と稱す

るのであらう。が既に横濱は天然に恵まれたる良港である。如何なる巨船も悠々遊弋到底東京沿海の水深淺きものゝ比ではない。然しながら東京築港の問題は全然否定せらるべき問題でなく、横濱港が帝都の玄關としての機能を何處までも發揮し得られない場合には、必然的に肯定され、又實現せらるべきものであることは言ふまでもない。即ち此處に完全なる横濱港の成備を考へねばならぬことになる。

震前に於て、予は横濱港調査會を組織し、横濱港の完璧を期すべく理想案の作製と、その具現の方法を策すべく之れに臨んだ。中途にして大震災に見舞はれたが、略々成案を得るに至り、その諸案は今後横濱港に最も必要な諸施設であることを痛感してゐる。その實現の爲めには、横濱市民は勿論のこと、帝都の咽喉を扼する國港として、東京市民も國民も一齊に相互協力して努めねばならないのである。既に復舊事業は著々として進歩を見つゝあるが、より完全なる幾多の施設は、或は速かに、或は近き將來に、是非著手されねばならぬ。焦眉の問題としては、通船の市營船舶給水の市營海員ホームの市設などが計畫されてゐる。又船舶へ物資を供給する爲め、市場の如きも計畫されねばなるまい。此等は皆寄港する船舶に満足を與へ、長き海上生活者の爲めに慰安を與へるもので、是非實現を要するものである。斯くて現在の規模の下に完全なる港灣施設

が出来更に進んで港の擴張と後方設備の建設があるのだ。即ち鶴見河口までに至る廣き海面を含んで一萬五千噸級、五十二隻の船舶を繋留し得る第四期計畫がある。若しこれが財政的關係から速に實現せぬとしても、此の計畫のうちの防波堤のみは、近く實現の可能性があり、港内の面積はこれが爲め現在に三倍するのだ。更に京濱運河の開鑿は現在の不備なる京濱海上聯絡を改めて間然する所なく、東京築港に巨費を投ずるの愚を敢て行はしめざるに至るものである。又一方には、現在の如く横濱港の後方地帯と陸上聯絡の不備のため、東北北陸地方の貨物の如きは兩國驛に至り、此處より舁回漕に依つて横濱港に至る如き、單なる一例には過ぎないが、改良の必要を知るに充分である。横濱・大宮間直通線の新設、鶴見品川間貨物線の増設、又は京濱急行電車の敷設等、數ふれば幾多の改良が行はれねばならない。完全なる港と雖も、後方地帯の設備がこれに伴はざれば、充分にその機能を發揮し得ないのは當然のことである。斯くして完全なる國港は出來上るのだ。横濱市民は此の基調の下に輿論を作興し、政府を鞭達して、目的の貫徹に努めねばならぬ。此の覺悟と決心とを缺いたならば、横濱は新しき横濱市の建設どころでなく、單なる『船つき場』に墮ちぬとも限らないのだ。

工業の振盛も、商業の繁昌も、都市計畫に依る諸施設の都市形勢の整美も、横濱港の消

長の投影であることを知らねばならぬ。

悲痛な試練の後に、市民は今横濱市建設の大業を爲しつつある。此の機會に於て、予は市民に提言したい。『港第一』の言葉は、何處までも我が『市民是』でなければならぬ。

(大正十四年一月震災誌の編纂に臨みて)

第三章 本市を中心として見たる震災の諸學説及調査

第一節 今次の大震特に横濱の大震に就て

神奈川縣測候所長技師 高 木 健述

一 今次地震の震源及震央

今次の大地震は、其の慘害及地變の程度に於て、慥かに全世界の記録を破つたものである。大帝都の半と大貿易港の殆んど全部を焼失したのみならず、其の他都邑村落の毀却、焼却されたもの數知れず、貴重の人命を喪つたこと無慮十萬餘に及ぶの大慘禍を呈したのであるが、更に地變に於て見ても、相模灣の海底には新たに四百米の沈降箇所を生じ、反對に二百五十米の隆起箇所を生じて、都合六百五十米二千四百五十尺、即ち相州大山の半腹以上に相當する一大地變を起したのであつて、實に地學上の一新事實として、世界の學界を聳動せしめたものである。そこで斯くの如き大慘害、大地變を惹起せしめた大地震の震央は抑々何處であるかといふと、或人は伊豆大島北方の相模灘なりと云ひ、或人は小田原の直ぐ北方なりと云ひ、或人は丹澤山塊の北方なりと云ひ、最近

又外國の學者は、房州南西沖合の海底にありと稱し、諸説區々にして一致せぬが、自分の研究した所では、此地震は恐らく相模海溝と酒匂川地震帶(所謂酒匂川弱線)とを連ぬる相模地溝の深き地底に起つたもので、而かもそれが小區域でなく、細長い區域に互つて陥落したものであらうと想はれるのである。震源を右の如くに考へれば、前記各説の震央とする所は、何れも悉く肯定し得られることとなる。即ち之を要言すれば、今次の震源は相模弱線の深き地下に或る長さを有したもので、其の波動が、南は安房の南西沖合から、北は丹澤山塊の北背までの諸點所々に現はれて、震央となつたものと謂ふべきであらう。

二 横濱市の被害劇甚なりし理由

震災地は何れとて慘狀を呈せざるはないのであるが、別して横濱市の慘害は實に言語に絶してゐて、其の各方面被害の計數は、市が小なるだけ東京には及ばないけれども、其の被害率から云へば、復かに東京以上に及ぶのである。横濱の被害が斯く特に激甚であつたのは、第一に其の震動の度合が大きかつた爲めでもあらうが、又一つには、市の大部分の地盤が脆弱であつた爲めでもあり、更に又、直後に起つた劫火が市街地の殆んど全部を焼盡した爲めでもあらう。前項既に述べた如く、今次横濱は震央とはなら

本市を中心として見たる震災の諸學説及調査

(今次の大震特に横濱の大震に就て)

なかつたのであるけれども、而かも横濱が震央地よりの距離に比較して、横須賀及東京よりも夙かに家屋の倒潰率が多かつた所以のものは、是れ全く市の大部分が最近代の埋立地であつて、地盤が脆弱であるからである。天然であり且つ堅固な地盤の所であると、震動も幾分か少なく、地面の動き方も一様であるけれども人工的であり、且つ脆弱な地盤の所は、岩盤と地層とが別々の動きをなす上に、埋立層が多少揺り下げられることを免かれないから、其の上に在る建築物の損害は、どうしても多大である。今回の地震後、茅ヶ崎町今泉なる相模川の舊流路に圖らずも顯はれた數多の橋杭の如きが、地盤揺り下げの好適例で、横濱市内にも電信の隠し杭の露はれたのが所々あるとのことである。又小田原茅ヶ崎厚木及有馬村等が、其れ等と程遠からぬ國府津大磯江ノ島等に比して被害の甚大であつたのも、東京で江東の二區が他區よりも惨害を呈したのも、云ふまでもなく地盤が弱い爲めである。

次に火災であるが、何にしても市街地の九分通を焼失して、殆んど全滅と謂はれる程の大火災を伴ふたのであるから、其の惨害は推して知るべしで、あの大火災さへなかつたならば、慥かにあれ程の惨害は、呈さなかつたのである。本邦に於ける古來の大地震に徴すると、上中古のことは、姑く記さず、弘化四年に於ける善光寺平の大地震は、區域は

狭かつたけれども、潰れ家及焼け家の數に對して、死者の數が四割餘に上ぼり、本邦でも死亡率の多い地震であつた。それに亞いでは今回の地震で、其の割合は二割五分六厘に當るのである。其のつぎは元祿十六年に於ける相房の大地震で、海嘯も併發し、死者の割合は二割五分三厘即ち今次のと略々同一程度であつた。明治二十四年十月二十八日朝の濃尾大地震は、當時では安政以來のものであつたが、火災が甚だしくなかつたので、死者の割合は五分一厘に過ぎなかつた。即ち縦ひ大地震でも、火災や津浪が酷くないならば、人命の損傷はそれ程でもないのであるが、今次のは未曾有の大火災が伴ふたのであり、殊に横濱は全焼といふ程度であるから、其の惨狀も隨つて最も酷くなつたのである。尤も震度が東京よりも大きかつた結果、家屋の倒潰率も壓死率も、東京のそれよりは夙かに多かつたのであるが、併し震度そのものとしては、小田原などよりは幾らか弱いやうである。弱いにも拘はらず小田原以上の惨害を呈したのは、前記の如く全く埋立地であること、更に火災の甚だしかつた結果である。即ち市内では第一震で煉瓦造の家屋倉庫が倒潰し、第二震で小さい木造家屋までも倒潰したやうである。又、當測候所の火元調及火災圖尤も火災圖には火元の密接した部分は略してあるにも見る如く、確かなりと認められる火元だけでも二百九十八箇所の多數に上ぼり、其のうち正午過ぎ十分までの間に

本市を中心として見たる震災の諸學説及調査

(今次の大震特に横濱の大震に就て)

發火したのが既に十數箇所もあつて、其の後次ぎくと諸所より發火し、而かも主風の外に火熱の爲め局所的に所々風位が急變したので、全市悉く風下になつたやうな状態で、加ふるに氣壓不連續線の爲めに強風を起し、數十の旋風も發生して、火勢は層一層猛烈となり、午後四時半頃風位が北に變すると共に、それまで辛くも焼け残つた部分までも悉く焼き拂はれて、他と運命を同じうするに至つたのである。

三 横濱に襲來する地震と横濱市民の覺悟

初めに述べた所の相模地溝なるものを説明せねばならぬ。元來關東方面では、小田原及伊豆宇佐美邊から南四十五度東に幅約六里に亘り、相模海溝と名づける。又之と反對に小田原より富士山と丹澤山塊との中間に向つて、酒匂川流域を辿る所の地殻の弱線がある。之を酒匂川弱線と名づける。此の海溝と弱線とは共に連續して殆んど同じ方向に横はつてゐるのであるから、兩者を併稱して自分は假に相模地溝又は相模弱線と呼ぶ。此の弱線の間は屢々地震が起り易いのであつて、既に述ぶるが如く、今次の地震も自分は此の弱線に起つたものと推測するのであるが、而かも尙ほ此の外に千島列島の南方から長く琉球附近にまで亘つてゐる所の所謂日本外側地震帯に發する地震や、東京灣口に集まつてゐる所の江戸川及鬼怒川地震帯に起る地震、それ等の何れ

かに發する地震で、それが若し強震である場合には、横濱のみならず神奈川縣では直に其の影響を受くるの虞がある。瓦や壁が落ちたり、建て付けの悪い家や古い建物が倒潰する程の地震に遭遇することは、平均十箇年又は二十七箇年に一回位あると思はなければならぬ。それ以上の大地震になると、平均二十八年目乃至三十七年目位にあると思はなければならぬ。更に又今回の如く相模地溝から大地震の起るのは平均七十年位の隔たりがある。即ち要するに横濱市否神奈川縣では、約三十年目に一回位は破壊的の大地震の襲來する虞があるのであるから、市民縣民は豫め常に覺悟してゐなければならぬ。随つて今後復興事業に著手し、建築を爲すに當つては、克く各方面専門家の意見を徴して、縦ひ大地震が襲來しても、今次の如き大慘害を再び繰返すことなきやう、充分注意することが肝要である。特に今次の苦がき經驗に鑑み、地震時に起り易き火災に就ては、防遏の方途を豫め充分講せらるゝやう切望する次第である。

四 神奈川縣測候所の被害と應急復興處置

イ 被害 概況

當日、本測候所では、備付の中村式微動計^{五十倍率}が發震と共に初期微動を記象したのみで、尋で直に起つた第一回の大波動の爲めに破壊し、驗測不可能となつた。廳舎は棧橋

本市を中心として見たる横濱の火災に就て

際に在つたものであるが、固より傾斜大破を免れず、構内は海岸の石垣崩潰すると共に、海岸寄の方面より崩落を始め、一震毎に段々崩れて、遂に観測野場の大半は跡形もなきまてになつた。斯かる次第で、僅かに發震時だけ讀み取ることが出来たけれども、標準時と比較するの邊はなかつた。爾後は辛うじて震動程度や時刻等を目測しつゝあるに過ぎなかつたのである。而も所長技師朝倉慶吉は、是より先き事務打合せの爲め隣接の港務部に往き、部長と對談中、同廳舎の倒潰すると共に下敷となつて職務に殉じ、悲愴の最期を遂げた。斯かる折しも本測候所の、向側なる舊居留地より發した火は、瞬く間に英一番館を焼き落し、本所に火焰を吹きつけるので、所員傭人等は擧つて観測原簿類の搬出を爲し、之を抱へて或は棧橋に、或は手近の端艇に避難しやうと努めたのであるが、火は益々迫り來り、雪崩をなして殺到する避難民の爲めに蹂躪せられて、折角運び出した簿書類も遂に散逸に委かすの已むなきに至つた。斯くて各自は思ひ／＼に避難したのであるが見る／＼うちに本所も焼け落ち、機械什器は固よりのこと、明治二十九年本所創立以來約三十年間の努力に係る貴重の観測原簿及研究資料等を悉く滅却して了つたことは、實に本所のみならず、觀測界にとつて實に惜みても尙餘ある次第である。

○ 應 急 處 置

観測事務は須臾も缺かしてはならぬけれども、奈何せん、災後本所は観測すべき器械は固よりのこと、記録すべき紙片も鉛筆もなく、之には實に困却した。其のうち所員荻原壽は所長事務取扱を命せられ、一同銳意して救急及観測復舊事務に従事し、六日より推測に依つて地方天氣豫報を發し、十三日漸くにして空盒晴雨計を得、且つ燒跡を發掘して地中寒暖計を取出したので、之に依つて覺束なくも器械觀測を開始した。當時の記入野帳はガラ洋紙數枚を綴じたもので、斯かる野帳は恐らく世界諸國の觀測界にも類例がないであらう。十四日より中央氣象臺の天氣圖に依つて地方天氣豫報を發することゝなつた。

ハ 觀 測 復 舊

十一月七日、海岸通九番地先なる東波止場報時球跡に本所假廳舎を開き、十四日、中央氣象臺より水銀晴雨計を、二十日、風力計を借用し、其他、百葉箱及寒暖計類を購入備付けて、稍々正式に観測を開始した。二十四日、高木健、新たに所長として東京より來任、十二月二十一日より正式なる地方天氣豫報及地方暴風警報を發することゝし、二十二日、中央氣象臺より雨量計を借用して、降水量を観測することゝした。其の後漸次に各種の

観測器械を購入して据付け、十三年一月一日より稍々完備せる観測を始め、同月二十四日、無線儀を備付け、二月九日、無線電信受信器を備付けて標準時を受くることとし、同年九月十五日には地震計を据付ける等、観測事務も次第に復舊したけれども、製造に多くの日子を要する器械類が未だ到着せぬので、完備の域に達するには、尙多少の年月を要するであらう。

第二一節 横濱震災前後の氣象竝に火災の火道

神奈川縣測候所調査

横濱港棧橋際に在つた神奈川縣測候所は、第一震と共に破壊した上、間もなく襲ひ來つた劫火の爲めに燒盡して、氣象観測を爲すことが不可能に陥つたのみならず、諸記録も悉く烏有に歸した爲め、震災前後に於ける氣象に就て詳記することは得ないけれども、當時港内に在泊中であつた大阪商船ロンドン丸竝に東洋汽船コレア丸の観測記録と、在東京中央氣象臺の観測記録とに依つて、横濱に於ける當時の氣象を大體推測することが出来る。

前記二船の観測した横濱界限の風向風力、氣壓及び氣温は別表記載の通りである。但し是等の各要素は甲板上の観測であるから、陸上観測のものとは固より同價値でない。又ロンドン丸は舶用水銀晴雨計に依り、コレア丸は空盒晴雨計に依つて観測したのであるから、前者の方が幾分正確に近いであらう。尙ほ兩船とも午後一時半乃至二時の間に岸壁を離れて沖合に出たから、その後の氣温等は全く陸上のそれと相違して居るであらうけれども、風向風力と共に陸上に於ける一般的の模様は畧々知れ得るの

である。天氣は陸上のそれと大差はないであらう。

八月三十一日來天氣稍々惡變し、重苦しき程の蒸熱を感じたけれども、未だ降雨するにも至らず、風も亦強くはならなかつた。超えて九月一日午前四時前後より降雨となり、南の強風吹き、屢々驟雨模様であつた。午前十時頃に至ると雨は歇んだけれども、雲は尙ほ全く散せず、依然強風吹き續き、風向は南西に變じた。斯かる天候を呈したのは、比較的弱勢の颱風が、能登の西方海上に來り、それに伴ひ生じた氣壓の不連續線は、中心より北東に延びて、佐渡と新潟との間を通り、其の枝線は高田附近より長野前橋の間を南下し、甲府附近に於て彎曲して遠江に入り、南は分派を相模灣にも生じ、甲府盆地には別に副低氣壓發生の状態を呈し、それが午前十時頃には純然たる副低氣壓に發達した爲めである。右の不連續線は其の後種々に變形して、夕刻に至つて通過し去つた爲め、横濱界限に於ては其の前より空霽れて、恰かも低氣壓が通過して了つたやうな空模様であつたけれども、風向風力等には大なる變化なく、通過した夕刻頃よりして、全く北風に變化したのである。

午前十一時五十八分三十秒標準時との照合を爲し得なかつた爲を以て、本測候所は、突如激震を感じた。實に從來曾て無き程の激震であつたが、發震後間もなく地震計が破壊した

ので、遺憾ながら驗測は全然不能に歸した。震動は最初甚大なる水平動來り、引續き間もなく激烈なる上下動に襲はれた爲め、市内の建物は大小となく殆んど悉く倒潰した。殊に煉瓦建物は第一回の上下動で一たまりもなく崩潰して、夥しき壓死者を出だし、到る所凄慘を極めたが、別けても舊居留地(山下町)方面は、多くは舊式の煉瓦建物であつた爲め、數箇の鐵筋建物を除くの外悉く倒潰して、文字通り全滅の慘狀を呈し、死傷が最も多かつたのである。搗てゝ加へて當時は恰かも午餐時刻で、何れの家にも火氣があつた爲め、發震後間もなく火は倒潰物に燃え付き、市内至る所より發火した。本測候所の調査に係る最も確實と思はれる發火點だけでも、其の總計二百八十九箇所の多きに上ほり、其の中でも舊居留地關内方面伊勢佐木町吉田町南吉田町方面野毛町附近岡野平沼方面鹽田神奈川驛附近等其の他數十箇所の火元は、直後に發火したもので、折柄吹き募つた南西の強風に煽られて、延燒の勢烈しく、或は合して大火流となり、或は崖地、不燃建物に衝突して更に數條に分かれ、或は所々に大旋炎を起すなど、燒けに燒け、燃えに燃えて、午後三時頃には市街地の大部分を火の海と化した。火勢が斯く猛烈な結果、大氣は急速に上騰して、雄大なる積雲キムクラウを醸成し、東京方面よりも遙かに雲頭の上昇運動を望み得られた。何分にも風強き上に大火を起したことで、大火は更に風を強めて、所に

よりては颶風の程度に達したのみならず、火團の中心に於ては氣温は恐らく攝氏千度以上にも昇り、湿度は全く乾燥して0%となつたことと想はれる。千度以上に達したといふ證據には、火先に直面した硝子類や鐵類の如何に厚いのも熔解してゐるのを見ても判かることで、尙ほ火中に長時間灼かれてあつた黄金銅の如きが熔解したのを見ると、温度の慥かに千百度以上に達したことが判かるのである。斯く大氣は驚くべき高温となり、且つ烈風を吹起した爲めに、旋風も所在に發生し、其の最も早かつたのは、午後一時前後、宮川町河岸に發生したもので、引續き一時半頃よりは所々に發生し、午後四時乃至八時の間が最も猛勢で、其の總數三十箇所の多きを算した。詳細は別に記す。如上猛烈なる火先は、初め南西風が吹いたので、大體北東に向つてゐたが、午後二時過ぎに至り、一小不連續線の通過して後は、風向が南より北に變つた爲め、火先は南方に向いた。而も間もなく又南西風となつた爲め、火先は再び北東に向ひ、更に午後四時半頃に至り、主不連續線通過すると共に、風向は又々北に急變した爲め、火先は更に南に折返し、それまでの間、辛うじて類焼を免かれてゐた平沼三丁目の西部、月見橋より横濱驛に至る省線の東側、横濱驛より平戸橋停留場、杉山神社を経て西ヶ原願成寺に到る一帯より天神山通に到る低地、南吉田町日枝神社附近、中村町三吉橋より道場橋に到る一帯等

までも、遂に焼き拂はれることとなつたのである。火先が斯くの如くに屢々方向を變へた爲めに、所によつては左右或は前後より火先を受けた所もあり、避難する者に取つても大脅威で、其の結果、避難中途にして焔に包まれたるも尠からず、所々に集團的慘死體を見るの慘狀を呈したのである。

火元を職業調にすると左記の如くで、それは大體に於て火を使用することの多い職業柄の家が多いのであるが、而も斯うした職業の家は一面火に注意するので、却つて火元とならないのも尠からぬやうである。遮莫あの場合の發火は、殆んど不可抗のことであつて、是非もない次第であらう。

横濱市大震大火災火元職業調

(職業)	(戸數)	(職業)	(戸數)	(職業)	(戸數)	(職業)	(戸數)
勤め人	二一	湯屋	一五	蕎麥店	一〇	藥品店	五
工場	一九	支那料理	一三	天ぷら店	八	煙草店	四
無職	一六	西洋料理	一二	旅館	八	質店	四
製菓業	一六	料理店	一一	豆腐屋	八	學校	四
不明	一六	西洋洗濯業	一〇	煎餅店	八	病院	四

差配業	三	倉庫	二	魚行	一	簾業	一	
材木商	三	大工	二	銀商	一	印刷業	一	
米穀商	三	醫師	二	足袋商	一	染物業	一	
海產物商	三	油商	二	造船業	一	水商店	一	
雜貨商	三	牛乳商	二	馬糧商	一	玩具商	一	
回漕店	三	商館	二	理髮店	一	劇場	一	
酒商	三	職工	二	空樽商	一	葷蕪製造業	一	
飯屋	二	遊藝師	二	船具商	一	燒芋店	一	
洋服店	二	石材商	二	箱具商	一	俵業	一	
會社	二	蠣灰商	一	鍛冶業	一	(計)		二八九
おでん屋	二	煮豆店	一	書籍店	一			
貸座敷	二	花豆業	一	官舎	一			
官公廳	二	釣舟業	一	請負業	一			

第三節 横濱大震大い火當時の旋風

(記事中に十三時とあるは午後一時十五時とあるは午後三時)

神奈川縣測候所調査

概況 九月一日大震後間もなく十三時前後に、火勢に煽られて宮川町川岸に一小旋風発生し、續いて十三時半、末吉町三丁目にも起り、前者は進行しなかつたが、後者は北々東に向つて一五〇米内外進行した。これを皮切りとして、所々に旋風續發し十六時二十時の間が最も猛烈で、辛うじて火先を避け得て漸く安堵したものや、安全地帯に避難しつゝあつた人等に火を吹きかけ、焼殺し或は負傷せしめた。この日發生した旋風の總數は調査し得た分丈けでも三十箇を算し、其内十七箇は中心が進行し、短きも一〇〇米内外を走り、長きは實に二二〇〇米を走過した。五〇〇米以上の生命を保つたものは七箇、一〇〇〇米以上のものは七箇、一〇〇〇米以上のものは三箇を算した。左に發生時刻順に其の程度を表示して見よう。

(發生順)	(發生時刻)	(消滅時刻)	(繼續時刻)	(發生地點)	(終滅地點)	(行程)	(進行方向)	(程度)
一	一三、〇〇時			宮川町川岸		一五〇米	北	小
二	一三、三〇	?	?	末吉町三丁目			々	中

横濱大震大い火當時の旋風

一〇	九	八	七	六	五	四	三
一九時前後	一八、三〇	一八、〇〇	一八、〇〇	一八、〇〇	一五、三〇	一五、三〇	一五、〇〇
?	一八、三〇頃	一八、三〇頃	?	?	?	?	?
?	同上(横濱驛前)	正金銀行西側	市役所裏	翁橋附近	境町(公園北門)脇	不老町(四丁目)附近	千代田橋附近
石川仲町	馬車道	同前	櫻木町七丁目	伊勢町四丁目附近	平戸橋附近	野毛山太神宮附近	鹽田橋附近
五〇〇	二〇〇	六〇〇	一、一〇〇	一、五〇〇	二〇〇	二〇〇	一〇〇以上
北西に變ず	北に變ず	北西に變ず	北西に變ず	北西に變ず	北西に變ず	北西に變ず	北西に變ず
中	中	猛烈	猛烈	小	烈猛	小	大

一五	一四	一三	一二	一一
二〇、四〇	二〇、三〇	二〇、三〇	一九、三〇	一九、〇〇
三、〇〇頃	三、〇〇頃	三、〇〇頃	三、〇〇頃	三、〇〇頃
中村町庫發物貯庫	千島橋	長島橋	三吉町四丁目	櫻木町驛
権三橋附近	長島橋	三吉町四丁目	櫻木町驛	山吹橋
五〇〇	二〇〇	二〇〇	一、三〇〇	一、五〇〇
北々東	北々東	北々東	北々東	北々東
大	大	中	中	大

表中の時刻行程は大凡のもので、只目安を示すに過ぎず。程度は旋風の生命の大小に關はらずに其の猛烈さを小中大猛烈の四階級に區分して當て候めたものである。消滅時刻及其地點は、今回の如き場合には不明瞭なることが本當らしいが、幾人かゞ次ぎ々と遭遇した同一旋風に對しては、參考の爲め最後に見た地點及時刻を記した。第十五圖(略)には横濱の火災に添へて旋風の状況を示してある。

實況 如上二十九個の旋風の實見者の談話中で代表的のもの數個を記せば左の如し。

三ノ二 神奈川元町 午後三時頃、神奈川元町附近に旋風起り、トタン板等を高く巻き上げた。(川名技手記)

○神奈川方面には三時から四時頃龍巻あり、トタン板を巻き上げツーンと落す。バケツを被つて遁げる。(藤原博士手記)

四 高島町八丁目 午後三時二十分頃高島町八丁目見橋附近に旋風起り、山積しありたる砂及トタン板等を巻き上げ。其の高さは三十間乃至四十間に達し、同四時半頃には高島町五丁目附近に來り、トタン板を巻き上げ、壘等を電柱の上あたり迄も巻き上げた。

附近の石油漕所より流出せる石油に延焼し、火焰甚だしく高く昇り、猛烈を極め、物凄かつた。同五時頃には高島驛附近に來れり。同所に避難せる松本信太郎氏の語る所によれば、五時頃旋風來りて、荷車の上に避難し居りたる病人は、車の側に落ち、同氏一家九名は南西へ約十間も持ち行かれた。其の途中のことは一向不明なれども、一同無事だつたと云ふ。(川名技手手記)

○三時、平戸橋の家より遁げ出して、四時頃高島驛に著いた。著くと間もなく火が移つて來たから、神奈川の方へ遁げ様としたけれども、築地橋が落ちて居たので行か

れず。此所(高島驛廣場)で避難して居た。五時頃になつてライジンダサン石油會社の方で非常に大きな音を立てたかと思ふと、トタン板等を高く巻き上げて、向つて來た。此時此處にやはり避難して居た病人を乗せた荷車は轉倒して、病人を落して車のみ飛んで行つた。(井上書記手記)

五ノ二 神奈川町宮之町にては、午後三時半頃、猛烈なる旋風が物凄く、火焰、トタン板等を巻き上げて居る爲に、消防署のポンプ自動車は前進する事が出来なかつた。

(川名技手手記)

九ノ一 翁橋附近 松影町四丁目の松村石油店河岸で起る。午後八時頃から九時頃の間で、巻き上げて東方へ落す。(瓦久氏談、藤原博士手記)

○六時頃、松影町五丁目の角にて旋風五六回起る。附近が既に焼け落ちてから起り、長い二間位の焼柱やトタン板、瓦等を電柱の二倍位の高さまで巻き上げて、長者町の方(北西方)に落した。(井上書記手記)

九ノ二 市役所裏 市役所が焼けて居る最中、夕方旋風が七八回起つて、トタン板等を五十尺位迄巻き上げた。そして電柱等にかなり引掛つた。

○夕方五六回市役所方面から川に沿ふて旋風が來た。此時トタン板等を二三十尺

高く巻き上げて尾上町交叉點(馬車道)の方に去つた。(吉田橋下河中に避難し居りし實見者談)

○旋風は火が暮れてから十時頃迄あつた。多くは豊國橋の方から来て、正金銀行の方に去つた。百五十尺位の高さまでトタン板や瓦等を巻き上げた。

○吉田橋附近にて、旋風は五時か六時頃、トタン板や焼けた材木等を八十尺位巻き上げて、關内の方から伊勢佐木町の方に向ふ。

○夕方少し前に眞砂町の方から、トタン板等を巻き上げて来た。そして吉田橋の邊から曲つて櫻木町の方に向つて行き、トタン板等は一尺位に見えた。(以上井上書記手記)

九ノ四 櫻木町七丁目附近に午後六時頃起りたる旋風は、川岸に沿ひて進み、花咲町

九丁目より南西に折れ、掃部山の西側を過ぎ、火焰を巻き上げて、戸部三丁目に出で山王山方面へ進む。(川名技手手記)

九ノ五 櫻木町七丁目横濱驛前 午後六時頃横濱驛附近に旋風起り、火焰を巻きつゝ平戸橋方面へ來り、南西へ走る。(川名技手手記)

十ノ一 馬車道、伊勢佐木町、吉田橋際 地震後間もなく火事、火の手は東手に上る。

吉田橋を渡り、尾上町方面に又火が上がる。引返す。吉田橋の際で火に巻かれ船に入る。水に入る。附近焼け落ちて後、水から出る。夕方旋風起る。初めは港町五丁目に起り、其の後火のある所へ諸方に起る。伊勢町方面にも起る。東の方面は不明。後野毛山にも起る。火の柱立ち、燃えさし、トタン板等を巻き上げて落すので、あぶなくて皆ワアと云ふて逃げ込む。高さは随分高し。(藤原千壽保氏談 藤原博士手記)

○吉田橋のところ夕方馬車道の方から旋風が来た。又指路教會の附近からも起る。共にトタン板を二三十尺も巻き上げる。方向は不明。(井上書記手記)

十一 櫻木町七丁目 午後七時頃、復た横濱驛方面に旋風起り、最初は(九ノ四)と同様の道を探り猛進したるも、櫻木町五丁目邊より更に西進して、掃部山の東側を掠めて、野毛山方面に七時半頃到達し、それより南西に折れて去る。九ノ四と、この旋風は、共に勢猛烈にして、其衝に當りたるものは、樹木家屋は其の渦巻く火焰の爲に、爆發的に發火し、悉く燃焼された。宮崎町にある正金俱樂部は爲めに延焼し、同所の留守番男女六名は窒息死した。(焼死したのではない) (川名技手手記)

○櫻木町で夜になつてから凄しい旋風に遭つた。どこから來たか解らぬ。八時頃らしい。(井上書記手記)

○太神宮境内の焼ける時(夕方)戸部方面(裏手)から旋風が来た。嘗だ夢中で解らぬ。(井上書記手記)

○太神宮の裏手の方で旋風に遭つた。此時恰度十全病院は焼けて居る時であつた。方向は解らぬ。(同上)

○太神宮境内前にて旋風に會つた。四時か五時頃で、火の子を吹きまくつて来たから解らぬが、戸部の方から来た。(同上)

○太神宮本殿前で旋風に遭つた。此時本殿は焼け始めた。恰度夕方本殿の焼ける時に、火の子が巻き上つたり、木が飛んで来たが、本殿が焼けてからは来なかつた。(唯一回)(同上)

十二ノ一ノ扇橋壽警察署附近 長者町二丁目二五番地附近は二時頃延焼した。此の附近一帯は松影町方面へかけて遅く焼けた。七八時頃壽小學校方面より旋風来りて、壽小學校の西側より川を越えて、千歳町の方に走つた。此時旋風が川に沿うて来る時には、川の水を持ち上げる様に見える、又川岸に立つて居ると霧の様に感じた。音は氣付かないけれども、回数は十回以上あつて、いつもトタン板等を巻き上げて来た(高さ不明)。此時は既に附近は焼け落ちて居た。(同上)

十三ノ櫻木町驛では旋風旺なりしは八時頃か。夜十二時頃吉田橋附近へ歸る。燃え終り、死骸だらけ。此邊にも旋風起る。此爲めに半焼けの船顛覆す。船がぐるぐる廻はる、水へは入らず、三箇所一度に起る時もあり、區々に起る。(藤原博士手記) 十四ノ二ノ長島橋 旋風は夜半の三時か四時最も強し(?)。日がかげつてから始まる。七時頃ならん、船で漸く防ぐ。自分の家は染物屋で、客の品ある故に、最後迄残り居りし故、火許はかなり知つて居る。湯屋と豆腐屋と洋服屋、活版屋、シノダ製造屋、旭パー洋食店、田口石屋から出る。旋風は南方から始まり、キリキリと巻き始まつたなと思ふ中、見る／＼中に通過し、附近兩岸にありしもの何でも皆上げる落る。自分は河の中で縮んで居た。附近には誰も見えなかつたが、武藏橋の方には『おあい船』に數人乗つて居つた(藤原博士手記) 豊國橋の上や川に居た人は旋風を見る。瓦斯管の様なもの飛び來り、水に入りて爆發す。(藤原博士手記)

○蓬萊町鶴ノ橋の通りの火事は、地震と直ぐにて三十分とはなし、直ぐ後の金屬屋から出る。女は船、男は河に入り、水をかけてやる。午後三時頃が一番強し。此頃人が死す、苦しい。旋風は夕方火が濟んでから六時頃、此邊一面持ち上げる。トタン

板でも何でも持つて行く。船に嘯り付いて居る。旋風は山から来る。一時間位の間来ては西を通つたりす。(藤原博士手記)

○酸素瓦斯倉庫(葛原)に火が入り管の口金の真鍮が溶け破裂して飛んで来る。三時頃なり。多分他の管の破裂の爲めならん。まるの儘飛んで来て水に入り、水雷の様にくゞる。ビュー〜と飛んで来る。一人是の爲め死ぬ。船の帆柱にあたり船がひつくり返へる。(藤原博士手記) (以上二件、自動車店員談)

○長島橋附近は夜の八時頃、トタン板等を巻き上げて来た。方向解らず。(井上書記手記)

十四ノ三ノ千秋橋 火は山吹橋西袂車屋から出て、北に磨く(一時頃)。向ふ河岸は十二時頃遁げ場なくなり、小船に乗る。朝迄居つた。夜の三時頃漸く楽になる。夫迄は水をかぶつて苦しむ熱い。旋風は詳しくは解らぬが、トタン板が木の葉の様飛んで来る。バースケ(一半偏平なる大ざる)をかぶつて助かる。附近からも上げる。橋の袂で大の男二人地割れにはさまり死す。開いたり濁まつたりしたらしい。(藤原博士手記)

十五ノ中村町揮發物貯庫 火は一時半頃北東から表へ向ふて来る。橋の方と先と

から来る。夜旋風が起る。三吉橋の東詰から西に見る。夜八時頃から明け方迄かと思ふ。トタン板等風程に見える。場所は此邊貿易倉庫の上で盛にやる。三間や五間は動くも大體は位置固定。(伊藤政七氏談、藤原博士手記)

○一時燃える。倉庫は油と紙とあり、直ちに燃える。角の藥種屋と倉庫が早し。旋風の無くなりしは八時か九時、船で見る。全部トタンと紙とがグル〜ブーンと音して非常なる勢で上げ、後落す、九時頃。(瓦久氏談、藤原博士手記)

○揮發倉庫にては旋風六時頃起り、樽を巻き上げる。(第二消防署員談、藤原博士手記)

○南西から火が来る。旋風は向ふ河岸の石油()倉庫にあり。黄金町から見る。最後迄(三時過ぎならん)居りて船に遁げる。船は過半数堀の内方面に遁げる。(藤原博士手記)

○衛生試験場附近にては、夜の八時か九時頃から焼け出した。七時か八時頃より旋風三回起り、トタン板や揮發の空樽を二十間も高く巻き上げて、山の根南東に落ちた。(井上書記手記)

○此附近は七時頃旋風數回起り、石油や揮發油の空罐を裏の山より十間も高く巻き

上げた。(山の高さは五一、九米。)(井上書記手記)

結論 當時人々は刻々に迫り來たる惡魔の手より如何にして免れんかと焦燥し、狼狽して、眞に身も世もなかつた急場であつたから、火災や旋風の發した時刻や、進み行く方向等は注意の外に置かれたことは當然である。而して予等が本調査を始めたのは災後約半歳を経て、人々救急バラックを出で、舊居住地の半永久バラックに歸り、將に營業を再開せんとする際を狙ふたのである。故に人々の記憶も朦朧となつて居り、調査には随分苦しんだ。前に掲げた表に記したものは、多數の人々の談話を綜合して最も眞に近しと思はるゝものゝみであるが、併し尙ほ時刻等は一二不安のもの無きにしても非ずである。此表以外に小規模の旋風は多數あつて、殆んど到る處發生したと稱しても過言でない位であるが、如斯は省畧した。併し顯著なるものは殆んど全部を網羅し得た積りである。今次の旋風の模様を見るに、強勢なるものが必ずしも進行するとも限らず。又進行するものも、風に逆ふものあり。従ふものありて、一樣ではないが、大體に於て風に從うて流れた様である。又進行せずして一箇所に停滯せるもの、又は短距離を走つたものゝ多くは、餘焰に煽られて生じ、火焰の後面に跟随したもので、眞の陣風線により醸成せられたかと思はるゝものは、風向に從ふか乃至は風向が從ふかの模様

が見える。旋風の發生したのは火事が下火となつた十六時乃至十九時の間が最も頻繁であつた。(十五時頃燒跡を通行出來た所もあつて十八時頃には大抵の所は鎮火したが、二十時過にも火氣に煽られて二三發生した)尤も十五は揮發物貯庫が尙ほ燃焼中に發したものである。(高木技師記)

第四節 地質學上より觀たる横濱の地形變化

第一項 緒言

今次の大地震は、關東一帯を其の震域とし、之が餘波は尙駿河信濃にも及び、神奈川縣管下に於て被害が最も甚大であつた。大震の結果、到る所土地の龜裂崩壞、低下及隆起を來し、所々に斷層を生じ、地下水及温泉は變化し、局部的には海嘯を起し、家屋宅地道路、田島港灣、山林堤防等の被害極めて大なるのみならず、四五の大小都市は火災と併發して、慘狀實に名狀すべからざるものがあつた。災後各方面の専門學者は争うて之が調査研究に従事し、其の結果の既に公けにせられたものもある。今茲に地質學上の見地より、主として横濱に於ける地形の變化に就て記述するのであるが、其の前に先づ震災地域一帯に於ける地質一斑を略記する。

第二項 震災地域の地質

震災地域に於ける最古の地質は、上部古生層で、主に粘板岩及砂岩より成り、甲州街道笹子嶺の西側に稍、廣く分布し、之に次ぐは主に凝灰岩及角礫岩より成る御坂層で、甲相境界山地の兩側及富士山の北なる御坂峠より東西に亘れる山地を占めてゐる。頁岩、砂岩、凝灰岩、凝灰角礫岩等より成る第三紀層は、廣く房總半島及三浦半島の主要部を構成し、及び御坂層を圍みて足柄地方より大山に達し、北に向ひ、更に西に轉じ、甲相の境界を過ぎ、大月より河口附近に連なつてゐる。主に凝灰岩及角礫岩より成る第三紀層は、箱根より伊豆の所々に火山岩に被はれて、小區域に露出してゐる。主に粘土及砂礫より成る第三紀新層は、相武上總等の臺地の下に露出してゐる。洪積層は相武上總等に亘る廣大なる臺地を構成し、壩塚粘土砂礫等より成つてゐる。沖積層は平地及砂丘を形造り、粘土及砂礫等より成つてゐる。火成岩の稍、廣域を占むるものは、石英閃綠岩で、笹子嶺より北及南西に亘る山脈及甲相の境界より東に至る山脈を構成し、玢岩輝綠岩、蛇紋岩等は小區域に露出してゐる。安山岩及其の他の火山噴出物は、足柄及箱根以南の地に廣く分布するの外、安山岩は岩脈を爲して小區域に露出してゐる。

震災は地質の如何によりて大差がある。即ち第三紀及其の以前の岩石並に閃綠岩、安山岩の地方には災害少く、洪積層の地方にも亦災害少く、災害の激甚なりしは、沖積地及埋立地又は盛立地並に火山噴出物の堆積せる地方であつた。

第二項 横濱の地質及震災

地質に關しては、之を臺地及平地に分ちて記述する。臺地の上部は洪積期の壩塚砂粘土砂礫より成り、不整合に第三紀層を被覆してゐる。第三紀層は臺地の下部を構成して、主に凝灰頁岩より成り、薄き砂層を挟み、多くは東方又は西南西に三度に傾斜してゐる。臺地の表面は元來波狀を呈してゐたのであるが、高きを削り、低きを埋め、又所々に盛土して、現在の市街又は住宅地を成したものである。平地は沖積地及埋立地で、主要市街は此地域にある。

家屋の倒潰數は、主要市街が焼失した爲に、十分明にすることを得ないけれども、各方面の資料より考察するに、左記の如くで、平地に於て特に多かつた。

全	(總戸數)	(燒失せざる區域の倒潰家屋數)	(燒失區域内の倒潰家屋數)	(合計)	(總戸數に對する百分比)
市	一〇〇、七九八	九、五九七	一八、三六七	二七、九六四	二七・七

地質學上より觀たる横濱の地形變化

臺	一四、四九九	一、二七一	一、一一五	二、二八六	一五・八
平	八六、二九九	八、四二六	一七、二五二	二五、六七八	二九・八

燒失家屋數は約六萬と稱せられ、其の内の倒潰家屋數は其の推定過少なるやに思はれ、又臺地と平地とに於ける倒潰家屋數の比率の差は小なるやに思はれる。但し山手町には倒潰家屋數特に多く、爲に臺地に於ける倒潰家屋の比が大なるに至つたこと、思はれる。

一 臺地

掃部山野毛山及山手の地域が燒失して、家屋倒潰の狀況が明かでないけれども、壙垣又は第三紀層を基礎とせる地に建てられた家屋は被害少く、山王山久保山及山手町に相當多數の倒潰家屋のあつたのは、畢竟盛土の上に建築せられたのが多かつた結果である。西戸部町山王山なる税關官舎、同久保山なる市營住宅及療病院、柏葉なる市營住宅等の如き、臺地の中、高きを削り、低きを埋め、又は傾斜地を高めたる敷地、即ち盛土の上に建築せられたるもの多き所は、概ね倒潰又は半潰の厄に罹らざるはなく、特に山手町の倒潰家屋は崖地又は其の邊緣に多かつた。

二 平地

神奈川驛の北東を成せる地域には、家屋の倒潰比較的少く、平均二割以下であつたが、横濱線と京濱線との分岐點附近を流るゝ入江川兩岸及東神奈川驛附近には、倒潰家屋多く、特に横濱線の西方なる入江川兩岸の市街は最も多かつた。蓋し此地域は、多く大正七年後の好況時代に發展した所で、建築に注意を缺いた個所も尠からず、工場及社宅並に之に伴へる住宅商店等が大部分を占めてゐたからであらう。

神奈川驛及其の以南には、埋立地多く、家屋の倒潰は五割以上に及んだといふことである。特に大正七八年後に發展した岡野町に於て甚だしく、近年發展した東海道西方の帷子川沿岸の工場及住宅は多く倒潰し、之に隣接した東海道東方の淺間町も亦家屋の倒潰が多かつた。

横濱驛以西なる東海道兩側二三町の地域内には、倒潰家屋五割以上に及び、櫻木町線の東方なる緑町には、完全なる家屋なしとまで云はれ、戸部町一丁目乃至六丁目の家屋も亦甚だしく倒潰した。

横濱の中樞なる關内は、震災最も激甚なりと稱せられ、大岡川及中村川に圍繞せらる

地質學上より觀たる横濱の地形變化

△三角形の地域の多くは、江戸時代の末葉に埋立てられ、關内と同じく五割以上の倒潰があつたやうである。大岡川の北西に沿へる地域、堀川に架せる谷戸橋より中村川に架せる龜ノ橋以南の地域に於ける家屋も亦被害甚だしく、倒潰五割以上に達したと云はれる。

三 其の他の觀察

家屋倒潰の方向 主に南北で、北々西又は南々東なるものが之に次ぐ。石碑及石柱も亦北又は南に顛倒し、東又は西なるものは少い。石碑の回轉は多くは左回りで、普通は二三十度、最大は四十六度であつた。掃部山なる井伊銅像は四十五度回轉した。

裂罅及低下 裂罅は海岸及河畔に竝び生じて其の數甚だ多く、且つ其の大なること他に多く比を見ない。其の形狀は區々で、海岸又は河畔に沿うて大なるもの數條竝走し、或は中央部の低下せるあり、或は一方の低下せるあり、或は階段狀に低下せるもあつて、落差は一米以上に達するもあり、多く開口して、其の幅〇・五五以上なるもあつた。裂罅と共に、特に海岸埋立地の多くは低下したるものゝ如く、最大一米に及んだ。

臺地に於ては、所々盛土の地域に小裂罅を生じた。洪積層及第三紀層には之を見な

かつた。

崩壊 崩壊も各所に生じたが、臺地の邊緣なる崖地に於て、多くは盛土の崩壊したもの、又は石垣の崩壊したものである。谷戸橋より龜ノ橋に至る南方の崖地二箇所崩壊し、其の下に在る多數の家屋を埋没又は破壊し、谷戸坂の北、道路の海岸に接する所特に見晴らしと云へる地の絶壁が二箇所崩壊したけれども、家屋の損害は少かつた。礫子の絶壁の崩壊では、其の下の大割烹店の一部を埋めて、約二十名の男女を生埋にし、其の堆積した崩壊土砂は、小丘の如くに盛り上がった。瀧頭扇ヶ谷の崖崩も大きかつた。

井水の變化及泥砂の噴出 井水は地震後多くは混濁し、三四日乃至六七日にして舊態に復した。井水又は裂罅より水及砂を噴出せるもあつた。横濱公園の一部や俗稱埋地一部に於ける水の氾濫は、水道鐵管の破壊に因るものである。

鐵路の被害 櫻木町驛の北西約五百米の上り線は、延長約五百米の間、一米乃至二、五米低下したが、下り線には異狀なく、神奈川横濱兩驛の間二箇所、十糧内外の低下を見た。其の他所々に十糧乃至三十糧低下せるもあつた。

神奈川驛附近に於て、十糧内外の低下及鐵路の水平に十糧内外の曲折は、數個所に之

を検した。横濱驛東方の引込線には、線路の低下、鐵路の水平の曲折甚だ多く、驛の東方約三十米の間二米内外低下し、鐵路は元通り殘存して空に懸つてゐた。高島驛の東には、復線の一線は一三米南方に曲折し、他の一線は元通りに殘存した。此外線路の低下、鐵橋の被害、石垣の崩壞等が多かつた。

横濱の震災は右の如くに激甚であつた。其の激甚なりしは、埋立地の多かつた事に基因するやうに思はれる。臺地の震災は概して輕微であつたに拘らず、山手町に倒潰家屋の多かつたのは、盛土に對する注意を怠つた爲であり、又一つには舊式煉瓦造の多かつた爲でもあらう。裂隙は殆んど埋立地、盛土地及沖積地に限られたかの如く、土地の低下も大體右の如くであつた。想ふに横濱附近の第三紀層は勿論、洪積層と雖も、今回の程度の地震に對しては常に注意を怠らざるに於ては、能く之に耐ふることゝ思はれる。

第三項 結

論

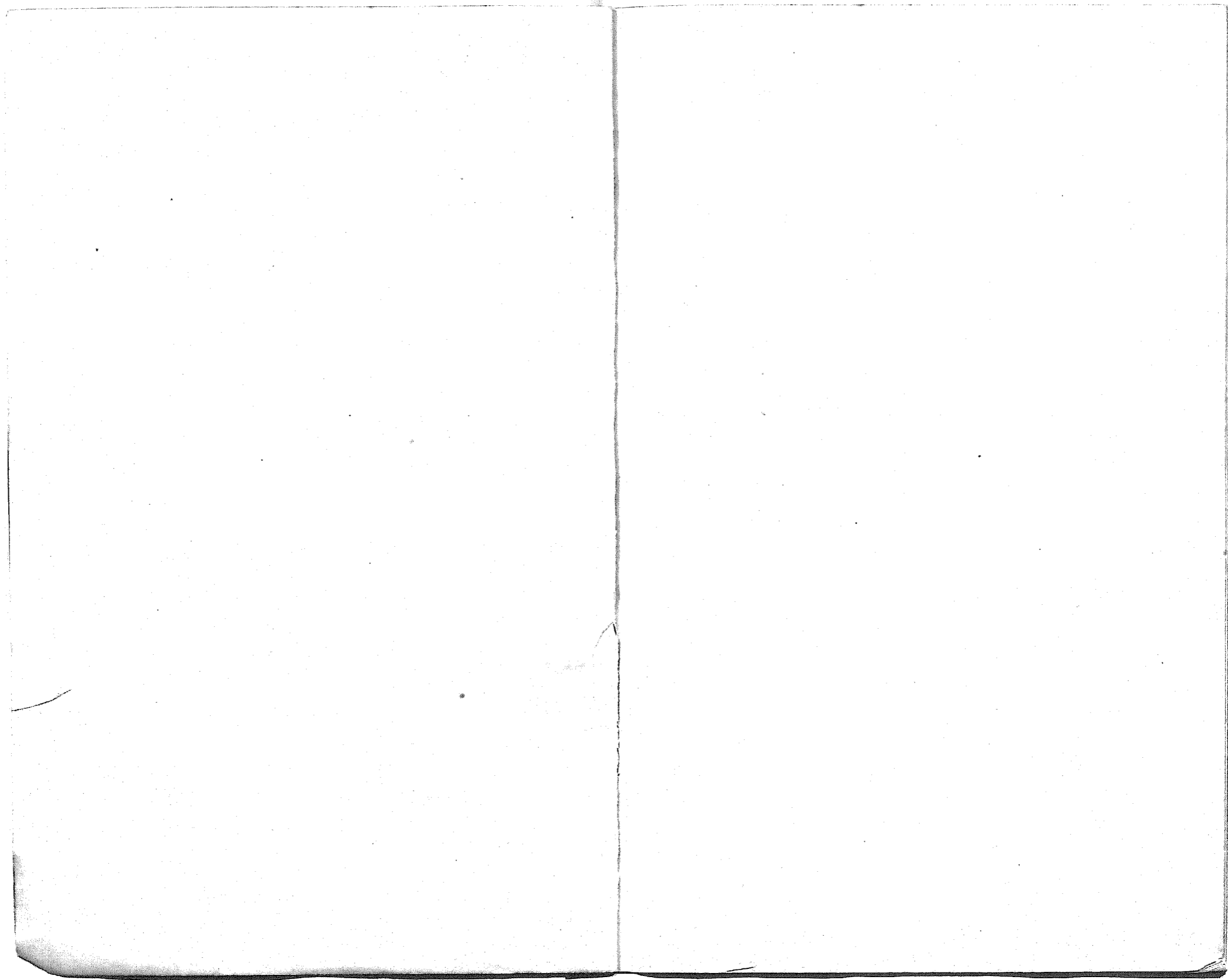
今次の震災で、地形の變化の著るしかつたのは神奈川縣下で、横濱も亦固より其の域に入つてゐるのであるが、其の最も著るしかつた箇所は、新に成生せられたる地質の鞏

固ならざる區域であつて、地質の良好なる地域はさしたることはなかつた。而して今次大地震の震源に關しては、専門學者の論議未だ一致するに至らず。相模灘の海底に就ては、地形上の變化に關して詳細に之を知るの要あるべきを想ひ、且つは諸學者の討議未だ盡くさざるの場合なれば、茲には敢て記述せない。前述の如く神奈川縣は、他の府縣に比し最も激震の地域であれば、震源地は神奈川縣によつて東西北の三面を圍まると、相模灘にあるらしく想ふのであるけれども、此等の議論は之を省略して、單に地變に就て記述するに止める。

(據井上嶺之助博士
所)

橫濱震災誌第一冊終

18070
昭和 29.10.13
横浜市立図書館



大正三年三月一日
大正三年三月一日

大正三年三月一日

大正三年三月一日

大正三年三月一日

大正三年三月一日

大正三年三月一日

大正三年三月一日

大正三年三月一日

大正十五年三月三十一日印刷
大正十五年四月二十二日發行

發行人

橫濱市役所市史編纂係

印刷人

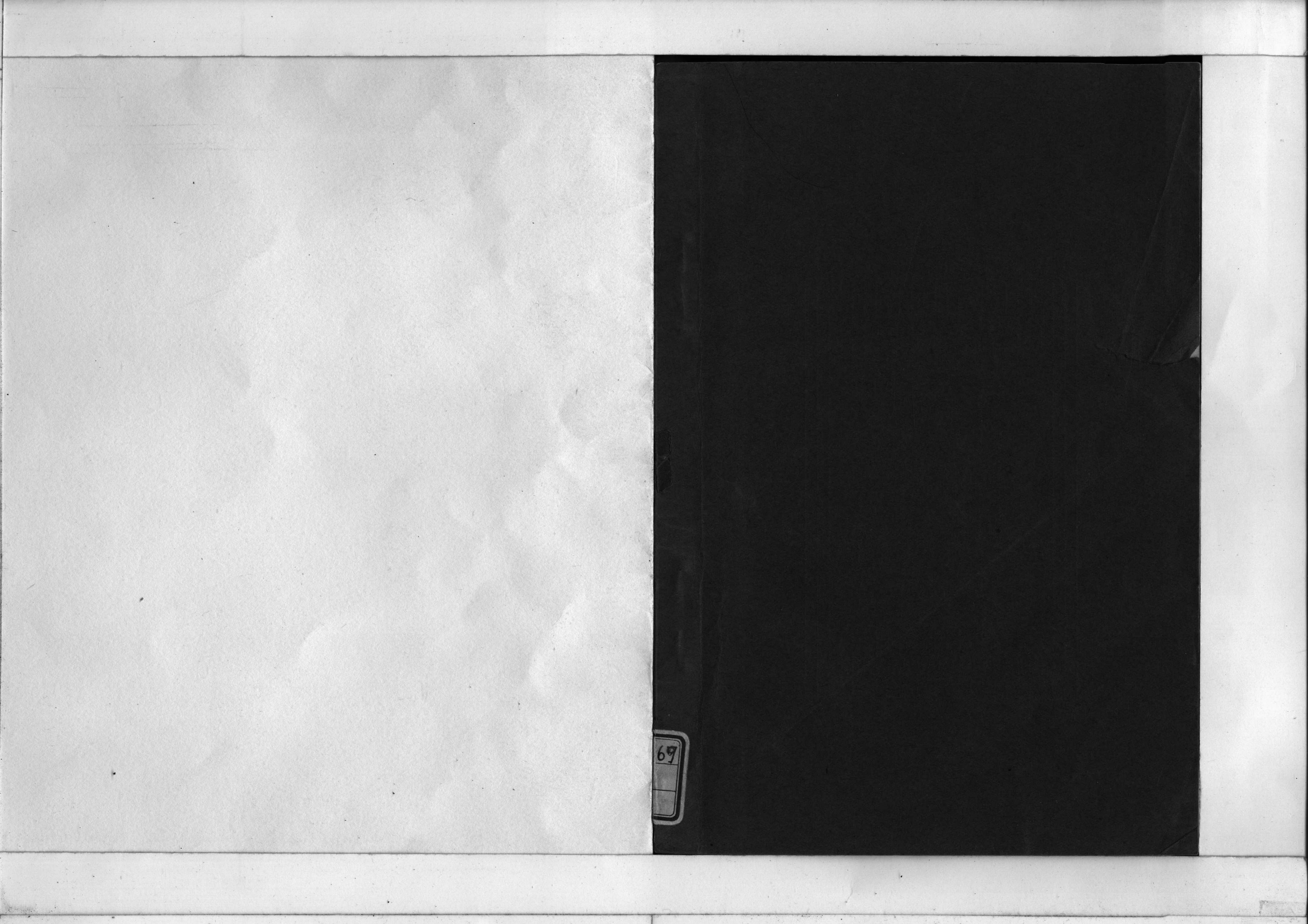
大橋 德壽
橫濱市根岸町竹ノ丸三二八番地

印刷所

大橋 活版印刷所
橫濱市相生町三丁目五十一番地

品 寶 非

Y369
1
5



69